

京都府埋蔵文化財情報

第 79 号

赤坂今井墳丘墓第 3 次の発掘調査 -----	石崎 善久・岡林 峰夫 --	1
方形周溝墓の被葬者—下植野南遺跡の調査から— -----	藤井 整 --	9
丹後地域における飛鳥時代から奈良時代前半の土器様相について -----	筒井 崇史 --	15
—特に横穴墓出土資料からみた土器編年—		
平成12年度発掘調査略報 -----		27
10. 桑原口遺跡第 5 次	11. 東山遺跡第 2 次	
12. 池上遺跡第 7 次	13. 太田遺跡第 13 次	
14. 百々遺跡	15. 佐山遺跡第 2 次	
16. 木津川河床遺跡第12次	17. 木津川河床遺跡第13次	
18. 上津屋遺跡第 4 次		
資料紹介 舞鶴市女布遺跡採集の有舌尖頭器 -----	吉岡 博之・黒坪 一樹 --	41
設立20周年記念事業をおえて -----	竹井 治雄 --	45
府内遺跡紹介 90. 大岩山たたら跡(御陵大岩町遺跡) -----		49
長岡京跡調査だより・76 -----		51
センターの動向 -----		53
受贈図書一覧 -----		55

2001年 3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭カラー図版1 赤坂今井墳丘墓第3次の発掘調査



(1)赤坂今井墳丘墓全景(上空東から)



(2)第1主体部墓壙上円礫・柱穴検出状況(北から)



(1)第4 主体部全景(西から)



(2)第4 主体部玉類検出状況(西から)

あかさか いまい 赤坂今井墳丘墓第3次の発掘調査

石崎善久・岡林峰夫

1. はじめに

赤坂今井墳丘墓は京都府中郡峰山町赤坂小字今井・ケビに所在する。平成11(1999)年に面的調査が実施され、弥生時代後期末に構築された国内でも最大級の大形墳丘墓であることが明らかとなり、関係機関との調整の上、現状で保存されることが決定した。これを受け、峰山町教育委員会は同年同墳丘墓周辺用地を買収し、文化遺産として活用していく方針を明らかにした。今年度の調査は遺跡の活用を図るため、墳丘規模・埋葬施設の構造・周辺埋葬施設の確認を行うことを主眼に実施した。

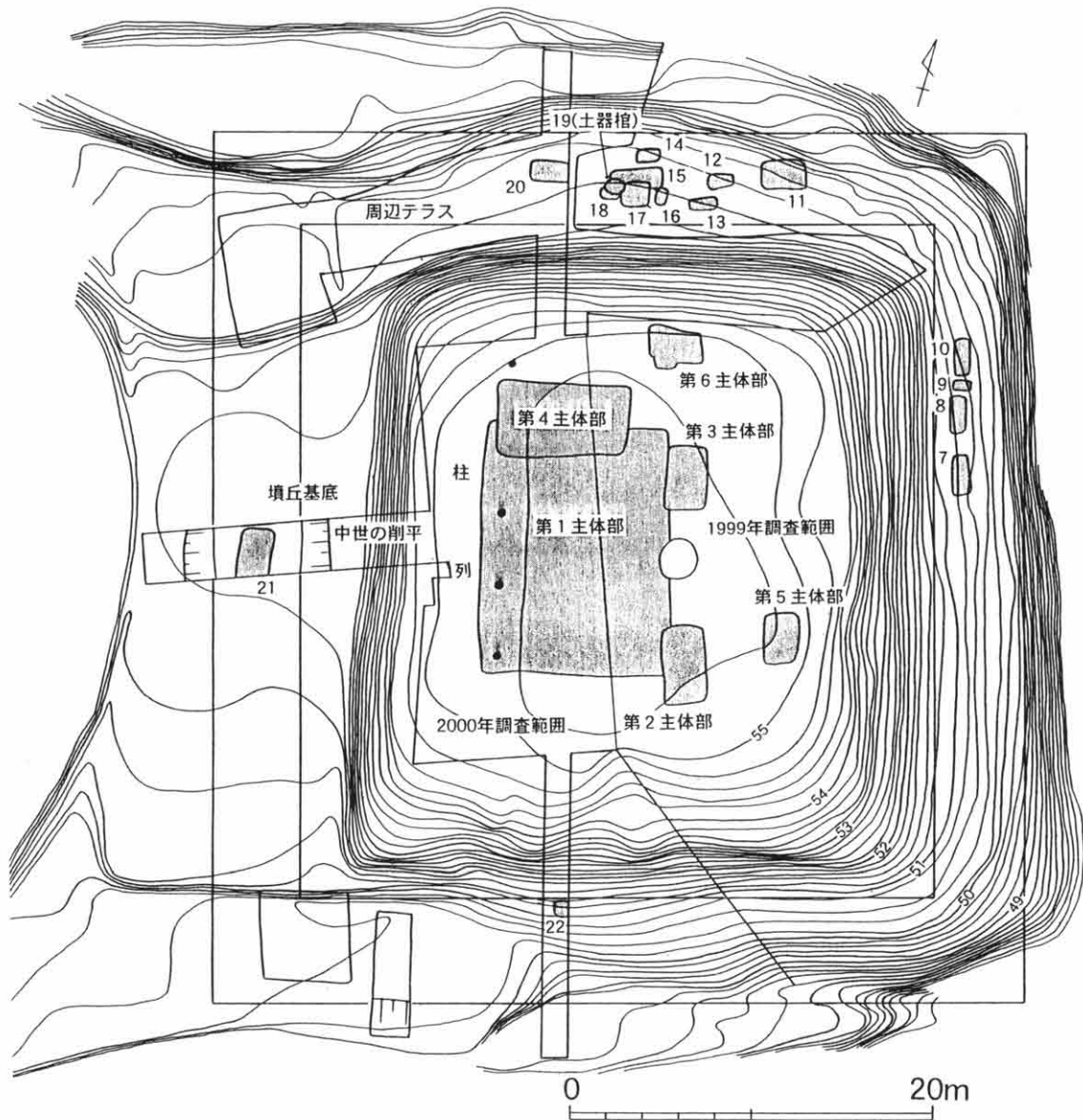
現地調査は(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターと峰山町教育委員会が共同で実施し、平成12年7月6日から同年10月18日までの期間をかけて行った。また、平成12年10月15日には現地説明会を行い約1000名の参加者を得ることができた。調査期間中は関係諸機関ならびに多くの方々からご教示・ご指導をいただくことができた。記して謝意を表したい。なお、本稿で使用した遺物実測図は、土器を同志社大学学生三好 玄が、鉄製品を同志社大学大学院生壱岐一哉が実測・トレースを行った。

2. 墳墓の立地と環境

赤坂今井墳丘墓は福田川流域に所在する。福田川は日本海にそそぐ小河川であり上流域は狭長な谷地形、下流部分はわずかな沖積地を形成している。河口部は現在でこそ埋め立てられているものの、昭和初期までは現北近畿タンゴ鉄道網野駅付近まで潟湖が形成されていたことが明らかとなっている。墳丘墓が面する狭長な谷地形を中郡盆地へ抜けていくと峰山町丹波あるいは矢田橋に至る。矢田橋付近には大田南古墳群が立地し丹波はその小字から見て丹波国分割以前の丹波国の中心であることが指摘されている。同時期の弥生集落として峰山町古殿遺跡が中郡盆地の北西に峠を介して存在し、また河口側では網野町浅後谷南遺跡が同時



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 赤坂今井墳丘墓調査前地形測量図およびトレンチ・検出遺構配置図(1/400)

期の大型集落である可能性が考えられる。以上のように、赤坂今井墳丘墓はその可視範囲内に集落遺跡が存在せず、河口から平野部へ抜ける谷の狭隘部に立地している点に他の集落近辺に立地する墳墓との差異を見いだすことができる。

3. 調査の概要

今回の調査の主目的は墳丘の規模を確定すること、中心主体の規模・構造を明らかにすることを目的に着手した。調査が進行するにつれ、小形の埋葬施設と考えていた第4主体部が幅約4m・長さ約7mを測る大形のものであることが明らかとなり、第1主体部に後出するこの埋葬施設を先行して調査することとなった。以下、各項ごとに概要を記すこととする。

墳丘 墳丘の調査は墳丘を縦断するトレンチを設け、さらに墳丘隅部分に突出部の有無を確認するためのトレンチを設定することにより行った。また、北側平坦面では数多くの周辺埋葬施設

が存在することが予想されたため平坦面の面的調査を実施し、その基数を確認することを主目的に実施した。

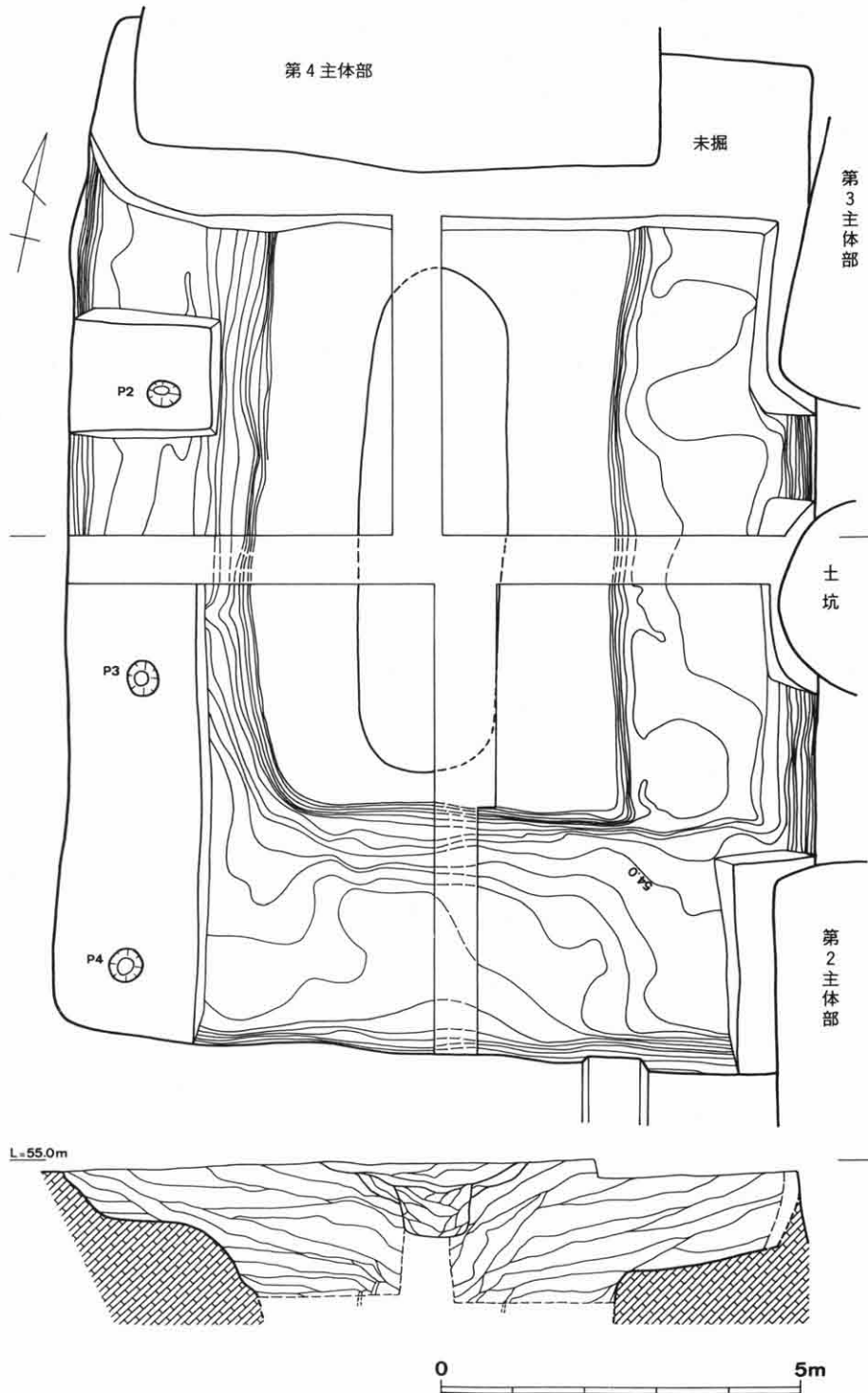
その結果、墳丘は東西35m・南北37.5m・高さ4mを測り、四周に幅4～5mを測るテラスが巡ることが明らかとなった(第2図)。テラスはおおむね地山を整形することにより造成されているが、旧地形が小谷状を呈する部分は盛土を施すことにより平坦面を確保していることが判明した。テラスの標高は約51mを測りこれは四周ではほぼ一致しており、当時の土木水準の高さを示すものといえよう。また、北側部分ではテラスの基底と思われる傾斜変換点を確認したが調査範囲が狭く確証を得るに至らなかった。墳丘の隅部分には特に地山を整形したり盛土を使用した形跡は認められず、また、1999年の調査成果からみても突出部はないものと判断される。周辺埋葬施設は北側テラスで10基、西側テラスで1基、南側テラスで1基、東側テラスで4基の計16基が確認されたが調査範囲の限定された部分もありさらに基数が増加することは間違いない。

主体部 今年度調査を実施した主体部は墳頂部で第1・第4主体部の2基、北側テラス部分で第19主体部の1基の計3基である。

第1主体部(第3図) 墳頂部中央からやや東寄りに構築された南北方向に主軸をもつ埋葬施設である。第2・第3・第4主体部に切られることから墳頂部の埋葬施設の中ではもっとも古いものと判断する。墓壙は墳丘盛土面から掘り込まれておりその規模は東西10.4m・南北14mを測る。墓壙の形態は変則的な二段墓壙を呈する。第一段目平坦面は南側から東へ向けゆるやかなスロープ状に傾斜し、高低差30cm前後のステップを設けて東側の第一段目平坦面に至ることとなる。南側平坦面で標高54.0m～54.5m、東側平坦面で標高53.5m～53.7m、南側平坦面で標高54.1m～54.4mを測る。北側の平坦面については第4主体部との切り合い関係を残したまま調査を行ったため詳細については明らかではないが、第4主体部墓壙南壁に示された状況からみると、墓壙主軸の標高約53.9mを最深部に東西からゆるやかに傾斜していく状況が読みとれた。第一段目墓壙のほぼ中心部に構築された下段墓壙は幅約6m・長さ8.5m以上を測る。こうした墓壙の形状は棺の搬入に際しての機能的な側面が重視されているものと考えられる。おそらく、木棺は墓壙南側から搬入され、いったん東側平坦面に降ろされた後、下段墓壙内に搬入されたと推測する。

棺は墓壙を約1.9m掘削した段階で棺材の腐食・置換痕と考えられる土壌の変化を確認した。ただしこの検出面は本来の木棺固定土面ではなく、確実性をもたせるためもう少し掘削して検証する必要性があったが、諸般の事情でこの段階で調査を中止せざるを得なかった。この段階で棺と考えた土色の変化から見ると、長軸約7m・短軸約2mを測る舟底状木棺である可能性が最も高い。

第1主体部では墓壙埋め戻し後の祭祀に関連する遺構・遺物を検出している。墓壙中央部分では木棺の腐朽に伴い形成された陥没痕内から円礫を用いた集石遺構が確認された。陥没痕は南北約7m・東西約3mを測り陥没痕底面に円礫が密着するような状態で検出された。円礫の出土状況を見ると重層的に積み重ねられたような状況は窺われず、むしろ平面的に並べられたものが落ち込んだような状態であった。円礫の上面を中心に弥生土器・辰砂が検出された。弥生土器は細



第3図 第1主体部平面図(1/100・平板実測による10cmコンタ図)および土層断面図

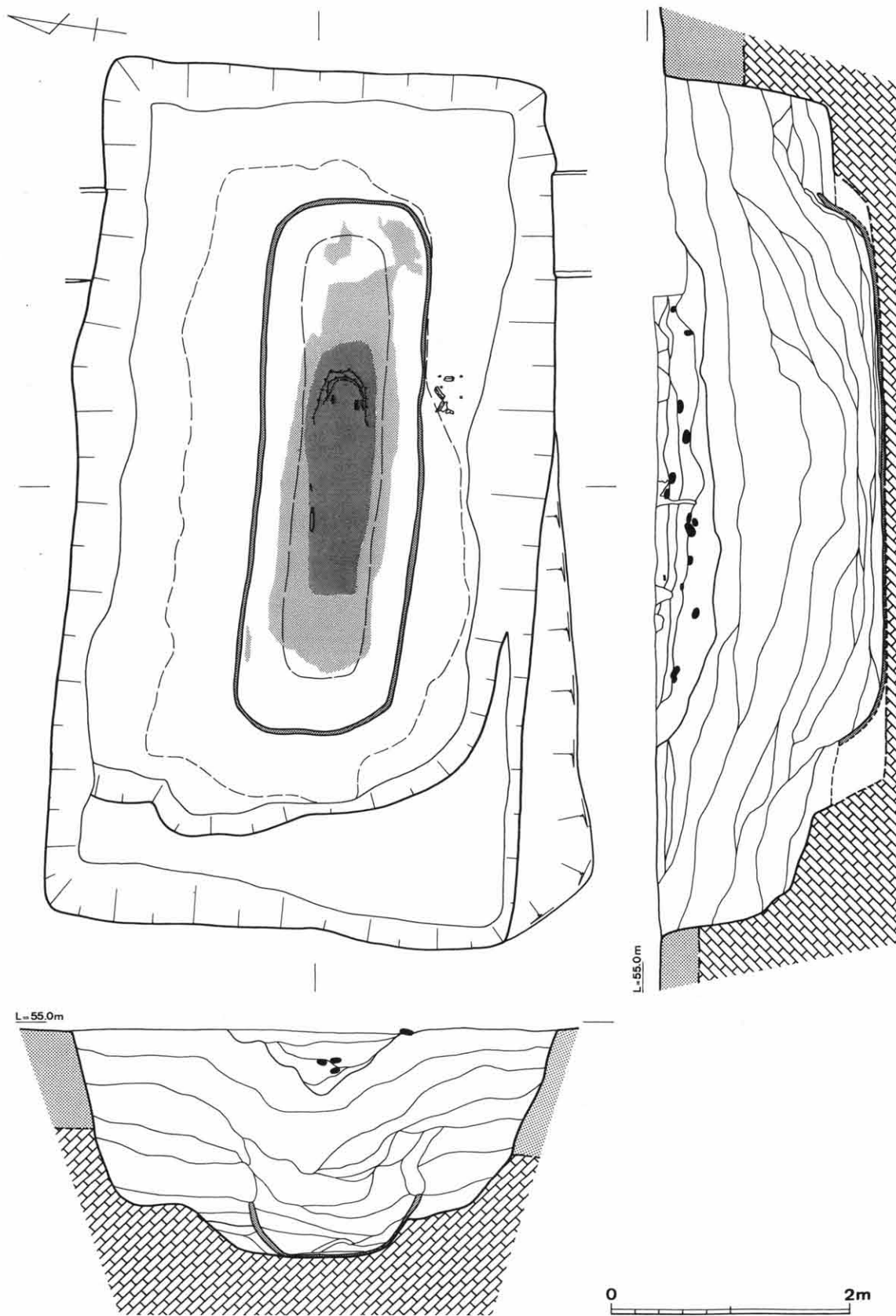
片化しており破碎した後に円礫上面に散布したものと考える。器種には器台・高杯・壺・鉢などが見受けられるが現在接合作業中のため個体数を確定するには至っていない。辰砂は現在1点のみを確認しているが、今後の土壌洗浄作業の過程で増加する可能性はある。また、墓壙中央でこの陥没痕底面から掘り込まれる直径約1m・深さ0.7mを測る円形土坑を検出した。土坑底部付近には炭が多く見られ、埋土は黒褐色粘質土系である。また、土坑壁面が赤変している部分もあり、土坑内で火が用いられたことを示している。この土坑の掘削時期と第1主体部の埋葬終了段

階あるいは周辺の主体部との时期的な関係については今後検証する必要があるが、埋葬終了後の追善供養的な性格を帯びたものの可能性がある。

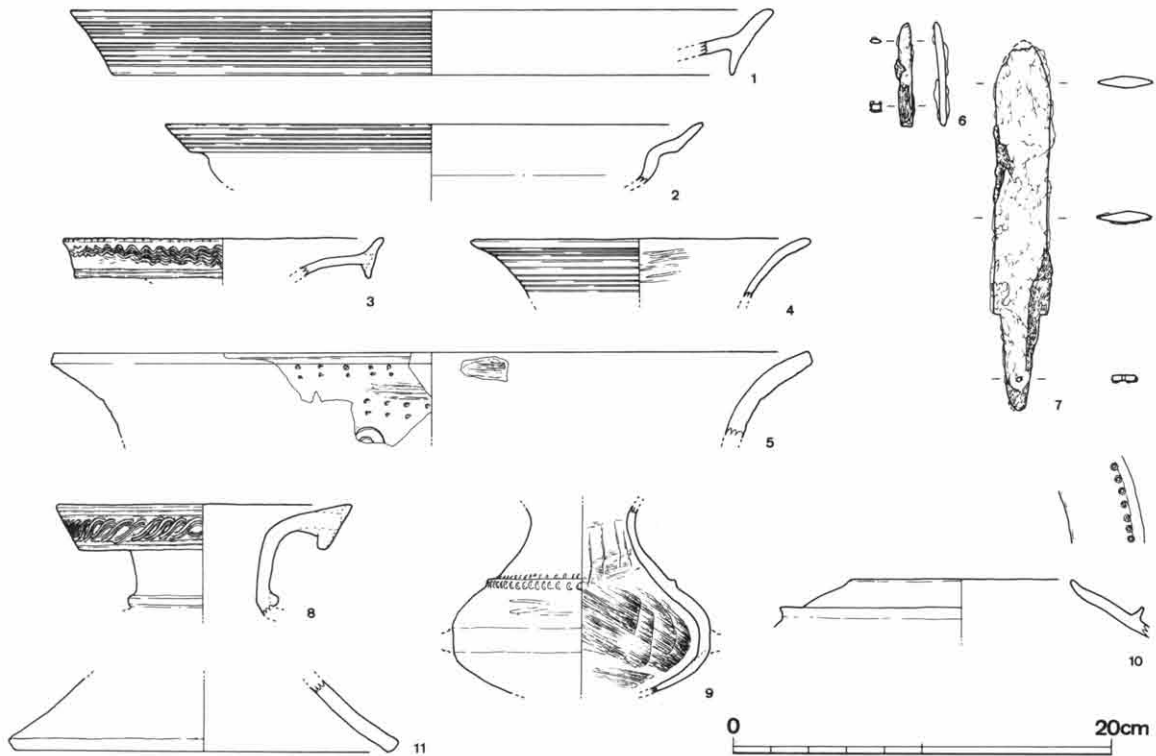
墓壙上面の祭祀関連施設として墓壙西側の柱穴列が挙げられる。柱穴は第1主体部の墓壙上面で3か所、第4主体部の北側で1か所の計4か所を検出した。規模はいずれも直径40cm前後・深さ40cm前後を測り、4m等間で一直線に並ぶ。また、第4主体部上にも本来なら存在するはずであるが検出することはできなかった。これは第4主体部構築時に柱穴が破壊されたことによるものと判断した。柱穴から柱痕の検出されたものはなく、埋土中から弥生土器片・微量の炭化物が出土している。この柱列は、第1主体部墓壙埋め戻し後に構築され、第4主体部構築時には破壊されていることから、墓壙上面における葬送儀礼に伴う柱列と考える。

第4主体部 第1主体部の北側に構築された南北方向に主軸をとる木棺直葬形態の埋葬施設である。墓壙は地山面および第1主体部墓壙を切り込んで構築されており、第1主体部に後出するものである。墓壙の規模は南北約7.2m・東西約4mを測る。墓壙は変則的な二段墓壙を呈する。第一段目の平坦面は西側を削り残し約20cmの段差をもって東側の平坦面に至る。これは第1主体部同様木棺の搬入に際しての機能的側面を重視した結果と考える。第一段目ほぼ中央に穿たれた下段墓壙は幅約1.7m・長さ約5.3m・深さ0.4mを測る。木棺は墓壙を約1.5m掘削した段階で木棺材の腐朽・置換痕跡を確認した。棺材は淡黄灰色系の極細砂を中心とした土壤に置き換わっており極めて明瞭に認識することができた。この面は木棺固定土のさらに1層上面の土層であることがその後の断ち割りによって明らかとなった。棺は両小口の平面・断面とも弧状を呈する舟底状木棺であり、その規模は長さ4.6m・幅1.3m・深さ0.5mを測る。木棺の横断面形は側板は弧状を呈するが、棺底面はやや水平に仕上げられている。棺内はほぼ全体に薄赤く顔料が塗布されており、この面もしくは淡黄灰色極細砂を検出することにより棺内埋土が除去できるものと判断された。これは後の断ち割りによっても確実なことが裏付けられた。棺底部中央は幅約60cm・長さ約2mの範囲に厚く赤色顔料が敷き詰められており、厚いところで1.5cm程度の顔料の堆積を確認することができた。なお、顔料の塗布部分が内棺に相当する可能性があったため、土層による検証に努めたが内棺の存在については存在しないという結論に達した。

棺内副葬品はすべてこの厚く敷き詰められた赤色顔料の上面から検出された。その内訳は東側から玉類、北側板に沿って東から鉞1点・鉄剣1点である。玉類についてはその出土状況から被葬者の頭位に頭飾り・垂飾具として用いられたものがほぼ原位置で検出できたものと判断する。頭飾りは3連の玉類から構成される。外側の連はスカイブルーを呈するガラス製管玉と大形のガラス製勾玉が使用されている。ガラス製勾玉は破損したのものも含め30点以上を数え、勾玉と勾玉の間に基本的に4点の管玉を配することにより1連を構成している。また、1点のみであるが北東側でこれらと直交する管玉を検出している。中央の連は碧玉製管玉とガラス製勾玉により構成される。外側の連と同様、基本的に勾玉間に4点の管玉を配する。内側の連は細身のガラス製管玉と小形のガラス製勾玉により構成される。また、この連の先端部分が中央の碧玉の連と接していることから先端でこの2連が結合されていたものと推定する。玉類周辺には草状の有機質が遺



第4図 第4主体部実測図(1/50)



第5図 赤坂今井墳丘墓出土遺物実測図(S=1/4)

1～4：第1主体部墓壇上 5：第1主体部ピット3 6～10：第4主体部 11：西側トレンチ

存しているが、これは玉類の上面から検出されており、頭飾りを装着した被葬者の頭位にかけられた面布のようなものかもしれない。なお、この有機質の上にも赤色顔料の堆積が認められた。垂飾具は被葬者の両耳相当部から一対が検出された。垂飾具は小形の碧玉製管玉から構成され、横に6列・縦に4～5段を簾状に配し、その先端には小形の勾玉を付す構造をとる。

4. 出土遺物

出土遺物には弥生土器・玉類・鉄器がある。現在、接合を含め整理作業段階であるため、図示したのはその一部である。接合作業の進展により再実測を行うが、参考として図示した。1～4は第1主体部、5はピット2、6～10は第4主体部、11は西側トレンチから出土した。土器群をみると、2・9のような丹後の伝統的な器種が存在する。一方、その他の土器は伝統的器種からの発展形態とは捉えにくく、他地域からの影響を視野に入れて考える必要性がある。また、2の有段口縁大形高杯は口縁部が著しく外傾し、太田4号墳下層などより新しい段階と考える。

5. まとめと展望

以上のように、赤坂今井墳丘墓は弥生時代後期末に築造された大形方形台状墓であることを再確認した。また、第4主体部は副次的埋葬施設であるにも関わらず、頭飾り・耳飾りといった豪華な装身具類を副葬している点も明らかにすることができた。

墳丘造成の際に動かされた土量は単純に計算して、西側部分だけで2,500m³以上を測る。現在の計算で2,500人の労働力が投入されたことになるが、実際には掘削した土を運搬したり、盛土

作業を実施する人々も必要であるから、実際に投入された労働人口は倍加するものと見られる。

墳形の点からは伝統的な方形台状墓の系譜を引くものとみられる。やや時期は前後するものの浅後谷南墳墓や金谷1号墓などは同様の方形台状墓を造墓しながらも、赤坂今井墳丘墓の下位に位置する集団により造墓されたものと見られる。また、これら方形台状墓の埋葬施設に舟底状木棺が採用されている点も注目される。弥生後期中葉以降、丹後半島で増加する舟底状木棺を採用する集団の紐帯による政治的関係が当時の丹後をひとつのクニとしてまとめる原動力といえよう。赤坂今井墳丘墓はこうした方形台状墓の頂点に位置する墳墓であると考えられる。

第4主体部出土の玉類はその出土状況が明らかであることも重要であるが、その組成にも注目すべきである。玉類にはガラス製小玉が含まれておらず、これは他の弥生墳墓から出土する玉類がガラス製小玉を主体とする点とは対照的である。

こうした内容からみて、赤坂今井墳丘墓第1主体部の被葬者は当時の丹後の広範囲に政治的影響力を及ぼした王とみたい。その権力の背景をなにに求めるのかは今後の課題であろう。これらの点については今後、第1主体部の調査・整理・報告作業を行う中で明らかにしていきたい。

また、今回の調査は峰山町の遺跡活用に向けての事前調査という性格があることも特筆すべきである。埋蔵文化財は、過去の人間の行為を示す貴重な歴史資料であり、その地域にとっては一つのシンボルとして活用し得るものである。その活用方法については慎重な議論が必要であろうが、峰山町は豊かな自然とともに文化財が多く残されている地域であり、その特性を生かした積極的活用が一つの課題とされていた。

赤坂今井墳丘墓は、府道交通安全施設の設置を契機として調査が行われた。しかし、その重要性が明らかになるにつれて協議を重ね、関係者の多大な努力により保存が決定された経過を持つ。今までの3次にわたる調査によってその様相が明らかになってきた現在、その成果を受け、峰山町当局においても遺跡整備に向けて、基本構想の立案、追加調査の実施などの検討に入ったところである。この遺跡が「地域に根付いた遺跡」として峰山町における遺跡整備のモデルケースになればと願うものであるが、そのための取り組みについてもまだまだその緒についたばかりである。関係各位のご指導ご叱責をいただき、さらなる解明に全力を傾注したい。

(いしざき・よしひさ=当センター調査第2課第1係調査員)

(おかばやし・みねお=峰山町教育委員会主事)

方形周溝墓の被葬者

—下植野南遺跡の調査から—

藤井 整

1. はじめに

方形周溝墓の主体部に埋葬された被葬者は、どういった階層にあったのか。近畿地方では人骨の検出例が非常に少なく、こうした問いに答えることは難しい。乙訓郡大山崎町下植野南遺跡でも、弥生時代中期中葉の方形周溝墓82基が検出され、主体部も38基検出されたが人骨は1体も検出できず、被葬者の年齢構成は推定にたよらざるをえない。近畿地方ではこうした制約の中で出自や親族構造について多くの研究がなされてきた。現時点でも人骨資料の蓄積は十分とはいえないが、階層性の問題について考えるために必要な、被葬者の年齢構成についていくらかの情報を得られるようになった。小論では子供の埋葬施設の抽出作業から、下植野南遺跡に埋葬された被葬者像について考えてみたい。

2. 下植野南遺跡の方形周溝墓

当調査研究センターでは、名神高速道路の大山崎ジャンクション建設に伴い、下植野南遺跡の発掘調査を平成10年度から継続して行ってきた^(注1)。この建設に伴う調査区に隣接する大山崎町立体育館の調査区^(注2)も含めると、調査面積は約17,000m²に及び、このほぼ全域から弥生時代中期の方形周溝墓82基が検出された。これまでの調査で名神高速道路の北側^(注3)と国道171号線の南側には墓域が広がっていないことが確認されており、墓域の全容が明らかとなりつつある。現在調査中のもも含めると、100基近い方形周溝墓が築造されたものと考えられ、山城地域はもちろん京都府でも類を見ない大規模な墓域の調査となった。注目されるのはこれらの方形周溝墓群が、畿内第Ⅱ様式の末から畿内第Ⅲ様式の初頭に中心をもち、墓域の形成から廃絶までの時間がきわめて短期間に集中すると考えられる点である。

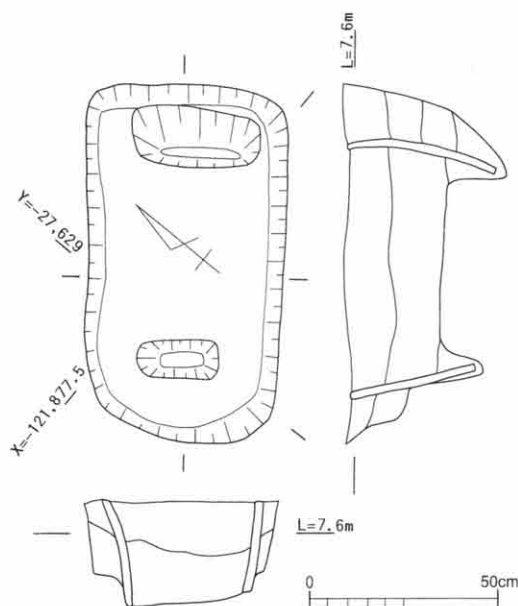
特に一部では、マウンドが完全には削平されずに遺存しており、それに伴って主体部も検出された。今回考察の対象となるのは、この墓域内で検出された38基の主体部である。主体部は木棺墓ないしは土壙墓で、確実に土器棺墓といえる遺構は含まれていない。主体部の大半は方形周溝墓の墳丘上で検出されたが、他に周溝内のものが1基と、墳丘を持たないものが4基ある。墳丘を持たないものは、方形周溝墓の空閑地に点在する形で検出された。特に2000年度のJトレンチでは木棺痕跡まで明瞭に観察できるものが多かったが、木棺材そのものや人骨は、遺存していなかった。主体部からは石鏃などが出土するものもあり、特にSTJ99では石剣が副葬状態で出土するなどの成果があがっている^(注4)。ここでは検出状況の良好なJトレンチを中心に検討を進めることにしたい^(注5)。



第1図 下植野南遺跡方形周溝墓遺構配置図(1/1,500)

3. 子供の木棺

木棺痕跡が確認できた主体部は20基であるが、このうちS T J 51で検出された主体部は掘形が長辺95cm・短辺52cm、木棺痕跡が長辺67cm・短辺42cmと小型の木棺が埋設されている。木棺は墓壙底面に小口穴を穿つ組み合わせ式木棺(福永伸哉氏分類I型木棺)^(注6)である。この主体部が検出されたS T J 51は墳丘の規模も一辺が5m前後と全体でも最も小さい方形周溝墓のひとつである。これまでこうした棺の長辺が150cm未満の棺は子供の棺であるとされてきたが、「子供」という用語の指し示す範囲を再定義する必要がある。



第2図 S T J 51主体部実測図(1/20)

まず、近畿地方の木棺墓に埋葬された事例の整理を行いたい。以下に示したのは近畿地方における人骨が遺存した主体部のうち、医学的な分析を経て、被葬者の年齢が明らかとなったものである。人骨分析結果をみると、13歳を越えた男子と、成人した女性は体格的に判別できないことが多い。このため12歳以下の、胎児から小児にあたる事例を子供の埋葬と位置づけて小論をすすめたい。なお、6～12歳を「小児」、3～5歳を「幼児」、0～2歳を「乳児」、それ以下を「胎児」として再整理する。

まず、中期の場合、棺の長辺、短辺の数値をグラフ化すると、第3図に示したとおり、12歳以下の幼児か小児の棺は、木棺墓の場合長辺110cm以下に集中しており、年齢の低いものがより小さな棺に埋葬されているということがわかる。言い換えればその体格に合わせた棺が用意されたものと判断できよう。

これに対して、後期段階には第4図に示したとおり、12歳以下の子供の棺と成人の棺が入り乱れ、境界を設定することはできない。巨摩・瓜生堂遺跡後期第2号方形周溝墓第8号埋葬施設^(注7)では、5～6歳の小児に長辺158cmの木棺が与えられている。明らかにその体格に不釣り合いな棺が、小児に用意されているのである。注目すべきことは、同時に第1号埋葬施設では、長辺148cmの棺に30～50歳の成人が埋葬されている点である。この成人は小児よりも小さな棺に埋葬されているのである。

福永氏によれば、後期には大半の被葬者は伸展葬となり、屈肢葬の比率は下がるが、まったくなくなるのではないとされている^(注8)。先の後期の2例の差が、こうした埋葬姿勢の違いによるものである可能性も考えられるが、いずれにせよ、巨摩・瓜生堂遺跡例のように、5～6歳の小児の体格に158cmもの棺は必要ない。この事例から、後期には棺の大きさが、その被葬者の優位性を表示するようになるということが言えるだろう。つまり、中期に限定すれば棺の大きさによって被葬者を推測することが許されるということである。

ところで、子供の埋葬施設は弥生時代中期の場合、土器棺墓・木棺墓・土壙墓の3施設がある。

このうち、土器棺墓と木棺墓・土壙墓の差異が、弥生時代の年齢階梯制に基づくものであることはすでに拙稿で述べたところである。^(注9)つまり、土器棺墓に埋葬されるのは、2～3歳以下の胎児ないしは乳児で、木棺墓ないしは土壙墓といった成人と同等の棺が与えられるのは、3～5歳以上という近畿地方の年齢階梯制が存在するものと考えられるのである。つまり、これまで150cm以下の木棺が子供の棺であろうと推測されてきたが、中期に限定すれば、長辺が110cm以下の木棺に埋葬されているのは、3～5歳以上12歳以下の幼児ないしは小児であると位置づけることができる。

4. 下植野南遺跡の被葬者

以上の結果をふまえて、下植野南遺跡の事例について検討したい。この遺跡で検出された主体部のうち、木棺痕跡などから確実に木棺墓であるといえるのは20基である。これを先の中期のグラフに重ね合わせたものが次の第5図である。先に検討したとおり、棺の長辺が110cm以下を幼児か小児の棺と考えると、S T J 51とS T J 89、S T J 90の3基が該当する。またS T J 133第4主体部も、墓壙長辺が最大でも130cmを上まわらない事が確実なので、これも子供の埋葬の可能性が高いとみることができる。つまり、3～5歳以上12歳以下の子供の被葬者は、全体の約15%と非常に少ないということになる。

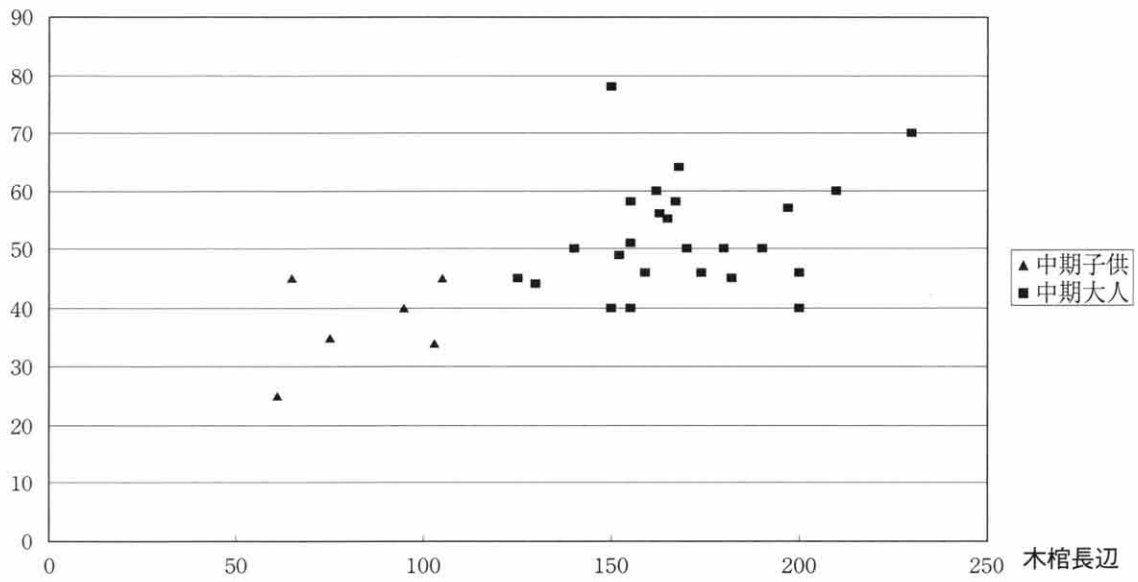
仮に下植野南遺跡で土器棺墓が全て削平されていたとしても、先に触れたように土器棺墓は胎児から乳児の埋葬施設と位置づけられるので、3歳以上12歳未満の子供の埋葬施設が少ないという結果は覆らない。また、下植野南遺跡の方形周溝墓群では墓域の東端をのぞいてほぼ範囲が確定している。もし仮に東へと墓域がのびることはあっても、これまでの近畿地方の墓域のあり方からみて、子供だけの墓域が存在するとは考えにくい。

一般に未開社会における子供の死亡率は高率であるとされる。弥生時代における子供の死亡率については推測の域を出ないが、この約15%という数値では少なすぎる。^(注10)つまり、下植野南遺跡では集落構成員の全てが埋葬されたのではない可能性がきわめて高いといえよう。つまり、下植野南遺跡では埋葬位置から、①墳丘上(区画内)②周溝内(区画内)③有墓壙(区画外)④無墓壙の4つの階層が存在していると考えられるのである。

ところで、下植野南遺跡で検出された方形周溝墓は単数埋葬と複数埋葬のものがある。墳丘部分の平面積が20㎡に満たないものから、170㎡近いものまでさまざまであるが、複数埋葬のものは最大4基の主体部が検出されている。主体部の単数、複数埋葬については、おおむね墳丘の平面積約80㎡にその境がある。仮に80㎡以上の方形周溝墓に4基、それ以下のものに1基の主体部が掘削されていたと仮定して概算すると、削平されたものも含めて約120人の被葬者が存在したものと推定できる。もちろん埋葬予定だけで埋葬されていない人も存在するであろうが、周溝内埋葬や墳丘をもたない主体部も良好な状態で同時に検出されており、やはり最低でも120人以上の被葬者ないしは埋葬予定者が想定できるのである。

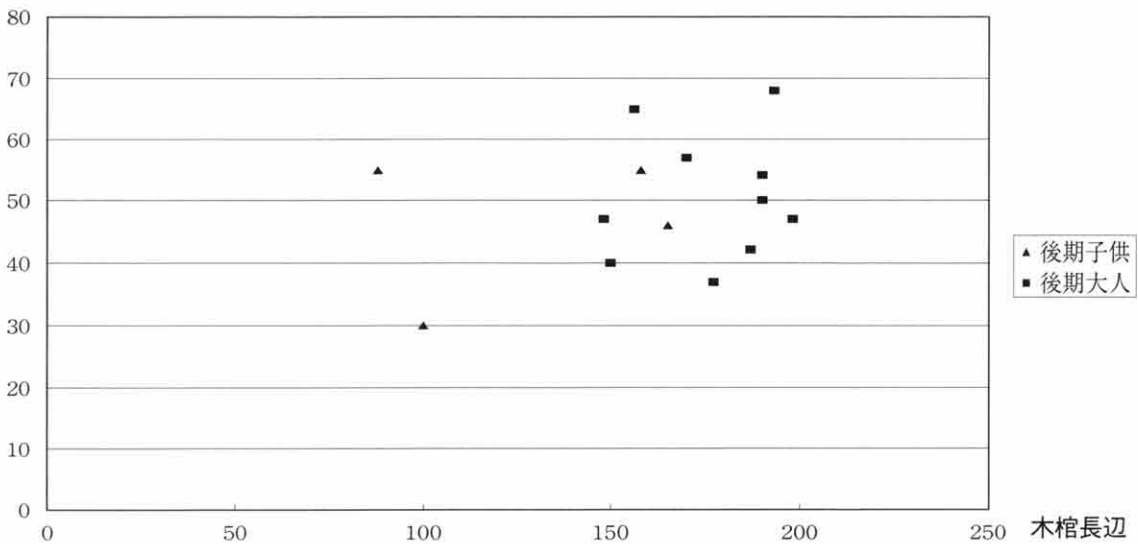
主体部の埋土は全て洗浄の対象としており、この中には石剣や石鏃が出土した主体部もある。

木棺短辺



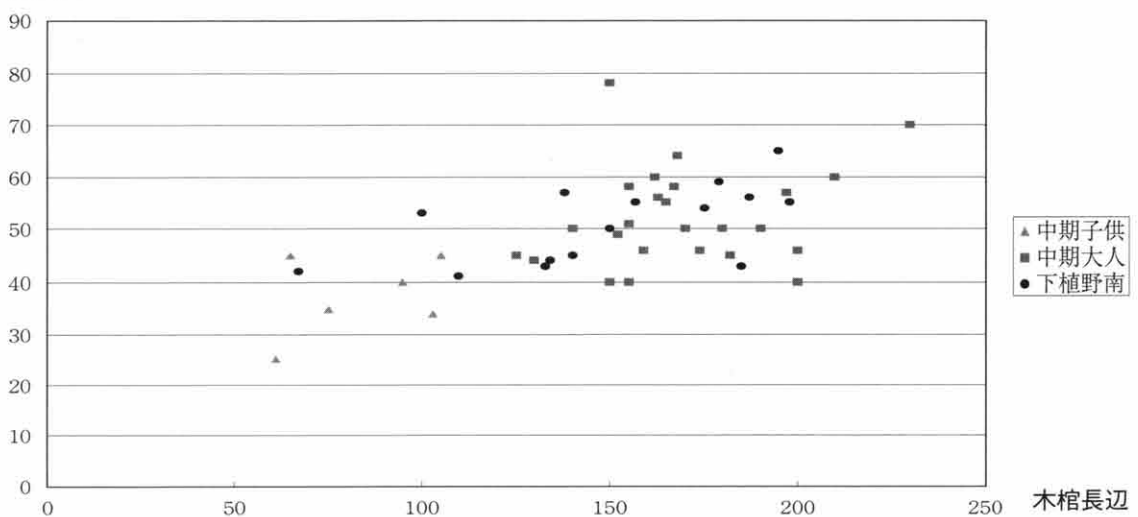
第3図 近畿地方における子供の木棺と大人の木棺（中期）

木棺短辺



第4図 近畿地方における子供の木棺と大人の木棺（後期）

木棺短辺



第5図 下植野南遺跡出土木棺痕跡と近畿地方における子供の木棺と大人の木棺（中期）

これらが仮に戦いの犠牲者であるとしても、畿内第Ⅱ様式末から第Ⅲ様式初頭の短期間に120人もの被葬者を埋葬することができた。しかもそれが集落構成員の全てではないとすれば、造墓集団の住む集落は相当な規模になるものと予測できるが、現在のところこの集落域と推定できる遺跡は見つかっていない。

5. まとめ

近畿地方の人骨検出例をもとに、下植野南遺跡の埋葬施設について整理した。あくまでも弥生時代中期に限った話であるが、棺の長辺の長さから子供の埋葬施設を抽出することができ、ここから下植野南遺跡に埋葬されなかった階層が存在した可能性を指摘した。また、この墓域に埋葬された被葬者の数が、最低でも120人以上と推測した。現時点では、周辺にこの墓域を支えられる集落は知られていない。山城と摂津を結ぶ要衝の地だけに、この墓域を形成したのが単独の拠点集落であったかも含めて今後の検討課題となろう。なお、下植野南遺跡は現在も調査中であり、今後の成果もふまえて再考したい。

(ふじい・ひとし=調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 石井清司ほか「名神大山崎ジャンクション関係遺跡 平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報第90冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
石井清司ほか「名神大山崎ジャンクション関係遺跡 平成11年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報第95冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注2 林 亨・近澤豊明・中塚 良『下植野南遺跡—長岡京跡右京第188次調査報告—』大山崎町埋蔵文化財調査報告第13集 大山崎町教育委員会 1996
- 注3 中川和哉ほか『下植野南遺跡』京都府遺跡調査報告書第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999
- 注4 複数年次にまたがる遺構名の重複を整理するため、遺構名称のS Tの後ろにトレンチ名であるJなどの記号を付けることとする。
- 注5 野島 永・魚津知克「下植野南遺跡方形周溝墓出土の磨製石剣」(『京都府埋蔵文化財情報』第78号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注6 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」(『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会) 1985
- 注7 玉井 功・井藤暁子・小野久隆『巨摩・瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1982
- 注8 福永伸哉「原始古代埋葬姿勢の研究—近畿地方を中心に」(『日本古代葬制の考古学的研究—とくに埋葬姿勢と葬送儀礼の関わり』) 1990
- 注9 藤井 整「近畿地方の弥生土器棺墓」(『古代文化』第53巻第2号 (財)古代学協会) 2001
- 注10 中橋孝博・永井昌文「寿命」(『弥生文化の研究』第1巻 弥生人とその環境 雄山閣) 1989

丹後地域における飛鳥時代から奈良時代前半の 土器様相について

—特に横穴墓出土資料からみた土器編年—

筒井崇史

1. はじめに

丹後地域では、この20年ほどの間に非常に多くの遺跡が調査された。そのほとんどが農地整備や道路建設、リゾート地開発など開発行為に伴うものであった。これらの調査によって、縄文時代から近世に至るまでの膨大な量の資料が蓄積されることになった。

筆者は、別稿で丹後地域の奈良時代の須恵器の変遷について検討を行った。また、舞鶴市浦入遺跡群の報告でも飛鳥時代から平安時代までの土器様相の変遷についての見通しを述べた。本稿は、この2編と姉妹編をなすもので、丹後地域に数多くみられる横穴墓から出土した土器を対象として、飛鳥時代から奈良時代前半にかけての土器様相の変遷について、検討を行ったものである。

2. 丹後地域における土器研究について

丹後地域の土器様相の変遷については、古墳や横穴墓の変遷との関わりで述べられることが多く、しかも陶器古窯址群や飛鳥地域、平城宮域などの土器編年と対照されたものが多い。こうした中で、出土土器の特徴などを検討しつつ、体系的な編年作業に取り組まれたのが橋本勝行氏である。橋本氏は、丹後地域の飛鳥時代における土器研究の問題点を指摘されている。以下、橋本氏の報告を引用しながら、問題点を確認したい。

まず、出土資料の実態として「古墳と横穴の資料が多いのが特徴で、わずかに窯跡と集落の資料がある」に過ぎない。また「古墳・横穴には恣意的に選ばれた器種のみが副葬される」こと、つまり「墓」における土器様相と「集落」における土器様相が異なったものである可能性がある。さらに橋本氏は、横穴墓などの「墓」出土土器について「横穴式石室や横穴の出土資料を扱う場合、追葬の関係から資料の一括性が問題になり、また「横穴・古墳・集落と性格の違う遺跡を一緒に扱うことにも問題がある」と、問題点を指摘された。

ところが、橋本氏はみずからの編年案を示すにあたって、問題があるとしながらも「少量しかない窯跡と山の集落の資料を主に使いながら、抜けるところは石室・横穴の資料を加えて丹後地域の7世紀の土器を検討」とされた。しかし、前述の指摘の重要性を考えるならば、筆者は、むしろ出土量の多い「墓」の資料による編年を検討した上で、「集落」や「窯」の資料と比較する方がよいのではないかと考える。

今回の検討は、この考えに沿って行ったものである。なお、検討資料を横穴墓出土土器に限定するのは、出土量が比較的多く、遺構の性格が単一である、という点において、現時点では丹後

地域の当該期における最良の資料群と考えるからである。もちろん、追葬の点から一括性の問題が残るが、複数の時期のものが混在する場合でも、別の資料と比較することで、同時性の高い土器群を抽出することができると思う。

作業方法としては、まず量的にもっとも豊富な蓋・杯類などについて、器形・法量・調整などにもとづく器種分類を行う。次いで、それらの器種構成の消長について、出土状況や畿内地域の研究成果によりながら、土器様相を大別し、その時間的変遷を明らかにしたい。

3. 出土資料について

(1) 資料の概要

丹後地域は、川上谷川・佐濃谷川・福田川・竹野川・野田川の各水系に分けることができる。このうち、横穴墓が特に集中するのが竹野川中流域の中郡大宮町周^す積^き周辺である。この地域では、「丹後国営農地開発事業」に伴う事前の発掘調査をはじめ、多くの発掘調査が行われてきた。以下に、本稿で取り上げる横穴墓群の概要について簡単に紹介したい。

①有明横穴^(注6)群 大宮町三坂有明に所在し、昭和60年と平成4年に計8基が調査された。本稿では、1号・5号・8号の各横穴墓から出土した資料を取り上げた。5号・8号両横穴では、土器の出土位置や型式差から数回の追葬がうかがえる。

②大田鼻横穴^(注7)群 大宮町三坂帯城に所在する。有明横穴群の北方250mに位置し、昭和60・61年の2か年にわたって、計30基が調査された。本稿では、2号・6号・14号・15号・17号・20号・21号・27号・28号・30号の各横穴墓から出土した資料を取り上げた。14号・20号・27号・28号・30号の各横穴墓では、土器の出土状況にまとまりが認められたり、型式差がほとんどないことなどから、追葬が行われた可能性は低いと考える。

なお、28号横穴では、須恵器を模倣したと思われる突帯付の土師器蓋があり、「厨」・「厨人」と墨書されている。ほかにも「厨物」と墨書された高杯がある。横穴墓の被葬者像を考える上で重要な資料である。

③里ヶ谷横穴^(注8)群 大宮町周積里ヶ谷に所在する。造成対象外となった1号横穴を除く5基が平成4年に調査された。本稿では、2号・5号・6号の各横穴墓から出土した資料を取り上げた。5号横穴では追葬された状況が確認された。

④左坂横穴A支^(注9)群 大宮町周積左坂ほかに所在する。平成4年と同7年に、6基中4基が調査された。本稿では、A5号・A6号の2基の横穴墓から出土した資料を取り上げた。

⑤左坂横穴B支^(注10)群 大宮町周積左坂に所在する。平成5年に筆者が調査を担当をしたもので、小規模な横穴墓6基を含む13基を調査した。本稿では、B5号・B7号・B8号の各横穴墓から出土した資料を取り上げた。いずれも追葬された可能性は低い。B8号横穴では、山陰地方(出雲・西伯耆地域)にみられる器形に類似した蓋・杯が出土している。

(2) 器種分類(第1図)

各横穴墓から出土した土器の様相を明らかにするため、器種分類を行う。器種分類は、蓋・

杯・椀・高杯などに限定して行く^(注11)。また、法量については(3)項で述べる。

①須恵器

蓋A ドーム型の天井部を有し、杯Aとセットになる。天井部にヘラケズリ調整を施すA aと、天井部ヘラ切り後不調整のA bに分けることができる。A aは、大田鼻20号横穴のみで確認できる。A bは法量による区分が可能である。

蓋B 内面にかえりを有するもの。宝珠つまみを有するB a、つまみを有さないB bに分かれる。B aは、杯B b・杯Cとセットになる。B bは、大田鼻6号横穴における出土状況から、後述する椀Xの蓋と考えられる。B aは法量による区分が認められるが、B bはほぼ同一の法量におさまる。

蓋C 宝珠形もしくはやや扁平な擬宝珠様のつまみをもち、内面にかえりを有さないもので、杯Cとセットになる。

杯A 立ち上がりと受け部を有し、蓋Aとセットになる。底部ヘラケズリ調整を施すA aと、底部ヘラ切り後不調整のA bに分けることができる。A aは、今回取り上げた資料中には確認できない。A bは法量による区分が可能である。

杯B 高台を有さないもの。器形上の特徴から、少なくとも3形式に細分^(注12)できる。B aは底部がやや丸底気味で、口縁部が内湾気味を呈するもの。蓋Aを杯に転じたような器形^(注13)を呈する。B bは底部がやや丸みを帯びる平底で、やや外反気味の口縁部を有するもの。底部から体部を経て口縁部へ至る立ち上がりの屈曲部が不明瞭である。B cは平底と外上方に直線的にのびる口縁部を有するもの。

B a・B cは蓋を持たないと思われるが、B bは蓋B aとセットになる。また、B cは法量による区分が可能であるが、B a・B bについては法量による違いは認められない。

杯C 口縁部がほぼ直線的に外上方にのび、平底に近い底部をもち、高台を有するもので、蓋Cとセットになる。法量による区分が可能である。

椀X やや丸底気味の底部から斜め上方にやや丸みをもって立ち上がり、体部中位にゆるい稜(あるいは沈線もしくは段)を施して、ほぼ真上、もしくはやや内傾しつつのびる口縁部を有するもの。杯B aに類似するが、体部中位に稜を有する点が異なる。法量に若干のばらつきが認められるが、区分できるほどではない^(注14)。また、必ずしもすべてに認められないが、蓋B bを伴うものもある。

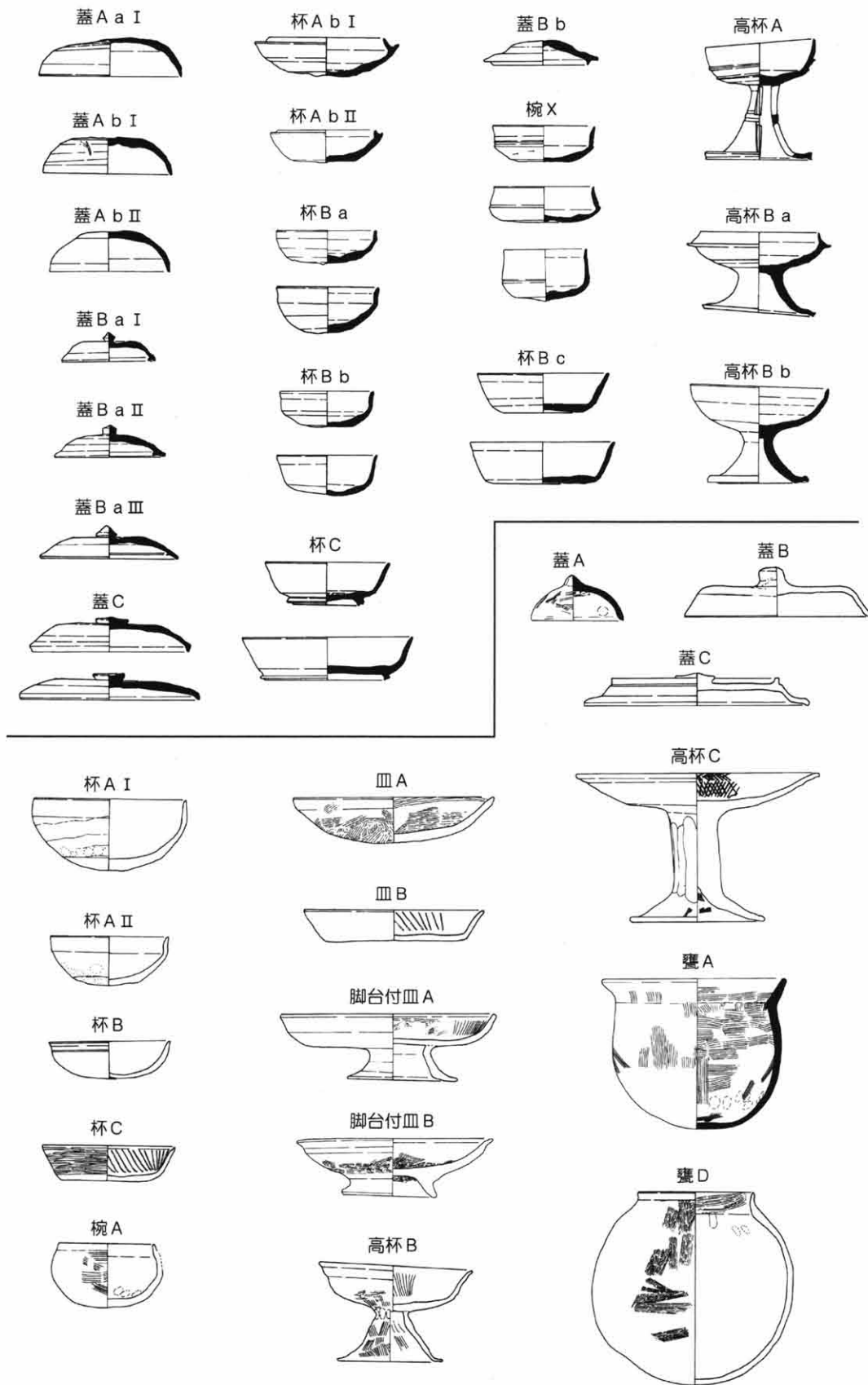
高杯A 長脚で脚部中位に沈線を施すもの。沈線を挟んだ上下2段にスカシを施す。

高杯B 短脚でスカシをもたないもの。蓋の受け部を有するB aと有さないB bがある。

②土師器

杯A 底部が丸底を呈し、口縁部外面にヨコナデを施すもの。器高が高く、底部調整はヘラケズリ調整・ハケ調整・ナデ調整などさまざまな調整が認められる。法量による区分が可能である。

杯B 底部が丸底気味で杯Aにくらべ器高が低いもの。径高指数の違いで杯Aと区別される。



第1図 器種分類表(上段：須恵器 下段：土師器)

杯C 底部が平底を呈し、底部と口縁部の屈曲が杯Bに比べて明瞭なもの。

椀A 口縁部が内傾し、底部は丸底を呈するもの。

皿A 底部が丸底気味のもので、口径が17～24cmと大きく、類似した器形である杯Bと区別できる。

皿B 底部が平底を呈し、底部と口縁部の屈曲が明瞭なもの。

蓋A 半球形状の天井部に乳頭状のつまみを有するもの。

蓋B 平らな天井部に斜め下方に直線的にのびる口縁部を有するもの。つまみは円筒状である。

蓋C 天井部外面に突帯を有するもの。須恵器の模倣と考えられる。

脚台付皿A 皿Bに類似した皿部にやや高めの脚台が付くもの。皿の底部と口縁部の屈曲はややゆるい。

脚台付皿B 皿Aに類似した皿部に低めの脚台が付くもの。

高杯B 杯状の杯部を有するもの。

高杯C 皿状の杯部を有するもの。

甕A 頸部の屈曲が緩く「く」字状を呈するもの。端部を丸くおさめるもの。

甕D 口縁部が短く立ち上がり、体部が球形状を呈するもの。

(3) 法量による区分

上記各器種のうち、須恵器蓋A b・蓋B a・蓋C・杯A b・杯B c・杯C、土師器杯Aの各器種について、法量による区分が可能である。ただし、須恵器杯B c・杯Cについては、別稿において窯跡出土須恵器の法量の検討を行った際に、「法量による器種分化」であることを明らかにした^(注15)。また、セット関係になる蓋Cについても同様に「法量による器種分化」としてを認めてよいと考えられる。

これに対して、須恵器蓋A・蓋B a・杯A、土師器杯Aの各器種では、法量の大小は「時間的前後関係」を表すと考えられる。ただ、どの程度の時間差が認められるのかは、今回の検討に使用した資料数に限りがあるため明らかにできない。本稿では、時間的な推移とともに法量が増加していることを指摘するにとどめたい。

なお、本稿では、法量による区分とその時間的把握を以下のように捉える。

① 須恵器

蓋A b 口径14～12cmを測る個体をⅠ、口径12～10cmを測る個体をⅡとする。また、数は少ないが、口径10cmを下回るものがある。出土状況からは両者が共伴した状況が多いが、畿内地域の編年に照らして、法量の大きいものが古く、法量の小さいものが新しいと考えられる。

蓋B a 口径10cm未満の個体をⅠ、口径10～13cmを測る個体をⅡ、口径13～15cmを測る個体をⅢとする。蓋B a Ⅰ・蓋B a Ⅱについては、それぞれが単独で存在する横穴墓(大田鼻21号・27号横穴など)がある。蓋B a Ⅲは、蓋B a Ⅰや蓋B a Ⅱなどとともに出土することが多い(有明5号・8号横穴など)。このことを畿内地域の編年に照らし合わせると、これら3タイプが継ぎつがいで出現したことを示していると考えられる。本稿では、つまみやかえりを有する蓋として同一器

種と捉え、法量の違いはその時間的变化を表すと考えたが、畿内地域では蓋B a I・IIは杯Gの蓋、蓋B a IIIは杯Cの蓋として認識される。

杯A b 口径12~10cmを測る個体をI、口径10cm未満の個体をIIとする。杯A b Iと杯A b IIが共伴するのは里ヶ谷5号横穴に限られること、左坂A 6号横穴では杯A b IIと蓋B a Iが共伴すること、などから杯A b IIが杯A b Iよりも後出すると考えられる。

②土師器

杯A 口径14~17cm・器高5~7cmを測る個体をI、口径10~13cm・器高4~6cmを測る個体をIIとする。法量変化というよりも、法量の小さいA IIがA Iとともに併用される状況が出土資料からうかがえる。ただし、A Iは古墳時代後期まで遡ると考えられるが、A IIはこの段階になって出現すると考えられる。

4. 出土資料の検討

各横穴出土土器に上記の器種分類・法量区分を当てはめて、その器種構成を明らかにすると第1・2表の通りとなる。結論から述べるならば、須恵器蓋を1つの基準として、器種構成上の特徴などから大きく3つのグループに分けることができる。各グループとも、須恵器の蓋と杯のセット関係はよく対応し、畿内地域における須恵器の変遷にもおおよそ対応する。すなわち、蓋・杯については、蓋A・杯A→蓋B a・杯B bもしくは蓋B a・杯C→蓋C・杯Cの順に推移したと考えられる。そこで、各グループをそれぞれ第1期・第2期・第3期とし、その特徴についてみていきたい。なお、ここで述べる時期区分は、おおむね浦入遺跡群における時期区分に一致する。また、別稿で述べた第1群という須恵器群が第3期の須恵器群に相当する。また、あわせて、グループ内の細別の可能性についても検討する。

(1)第1期

須恵器蓋A・蓋B a・杯A b I・杯A b II・椀X・高杯A・高杯B a・高杯B b、土師器杯A I・杯A II・椀Aがある。須恵器蓋A・杯A、土師器杯Aを除けば量的にそれほど多くない。

須恵器では、蓋Aは、大田鼻20号横穴においてのみA aが認められ、他はすべてA bである。杯AもA bのみが確認できる。蓋B bは椀Xとセット関係が認められるが、その数は多くなく、したがって限られた時間幅に存在する可能性がある。杯Aは、杯A b Iが第1期で消滅するが、杯A b IIが第2期の左坂A 6号横穴にも見られ、この時期までの残存すると考えられる。

土師器は、出土する器種に限られる。量的には椀Aは非常に少なく、杯Aが主体となる。杯Aは法量の違いがあるものの、出土状況などから前後関係は認められない。「法量による器種分化」が発生したと考えるべきであろうか。

須恵器蓋Aや杯Aにみられる外面調整のうち、ヘラケズリを施すものが古く、ヘラケズリを省略するものが新しいと考えられている^(注16)。このことから第1期をa・bの2小期に分けることができる。第1期を構成する器種のうち、須恵器の大半は第2期にはみられない。これに対して土師器はいずれも第2期においても確認することができる。

丹後地域における飛鳥時代から奈良時代前半の土器様相について

第1表 須恵器器種構成一覧表

時期	横穴名	蓋							杯					椀	高杯				
		A I	A II	B a I	B a II	B a III	B b	C	A I	A II	B a	B b	B c		C	X	A	B a	B b
第1期	a期	大田鼻20号横穴	●*														●	●	
	b期	大田鼻2号横穴	●	●						●		●						●	
		里ヶ谷2号横穴	●							●									
		大田鼻6号横穴	●	●				●		●							●		●
		里ヶ谷5号横穴	●					●		●	●								
第2期	a期	左坂A 6号横穴			●						○	●	●						
		左坂A 5号横穴										●	●	●		●			●
		大田鼻21号横穴			●							●	●						
		有明5号横穴			●	●	●					●	●		●				
		有明8号横穴			●	●	●					●	●	○	●				●
	b期	大田鼻27号横穴				●						●	●						●
		大田鼻15号横穴										●							
		里ヶ谷6号横穴										●							
		b/c期	大田鼻17号横穴			○	●	●		○			●	●	●				
有明1号横穴					●	●					●	●	●						
第3期	a期	左坂B 8号横穴					○		●					●	●				
		大田鼻30号横穴							●					●	●				
		大田鼻14号横穴							●					●	●				
		左坂B 5号横穴							●						●				
	b期	左坂B 7号横穴																	
		大田鼻28号横穴							●						●				

第2表 土師器器種構成一覧表

時期	横穴名	杯				椀	皿			高杯			蓋			脚台付皿		甕	
		A I	A II	B	C		A	A	B	B	C	A	B	C	A	B	A	D	
第1期	a期	大田鼻20号横穴																	
	b期	大田鼻2号横穴	●	●															
		里ヶ谷2号横穴																	
		大田鼻6号横穴	●	●															
		里ヶ谷5号横穴	●	●			●												
第2期	a期	左坂A 6号横穴		●															●
		左坂A 5号横穴	●	●	●			●			●								
		大田鼻21号横穴			●														
		有明5号横穴	●		●		●												
		有明8号横穴	●		●			●											
	b期	大田鼻27号横穴	●	●															
		大田鼻15号横穴	●	●	●			●	●				●						●
		里ヶ谷6号横穴		●	●			●	●						●				●
		b/c期	大田鼻17号横穴	●	●	●			●							●	●		
有明1号横穴	●						●										●	●	
第3期	a期	左坂B 8号横穴																	
		大田鼻30号横穴	●																
		大田鼻14号横穴			●			●										●	●
		左坂B 5号横穴						●		●									
	b期	左坂B 7号横穴				●				●									
		大田鼻28号横穴				●				●				●					

(2)第2期

須恵器蓋B a・杯B a・杯B b・杯B c・杯C・高杯A b、土師器杯A・杯B・皿A・脚台付皿・蓋A・蓋B・甕A・甕Dなどがある。大田鼻17号横穴では須恵器蓋Cが認められるが、追葬であろう。

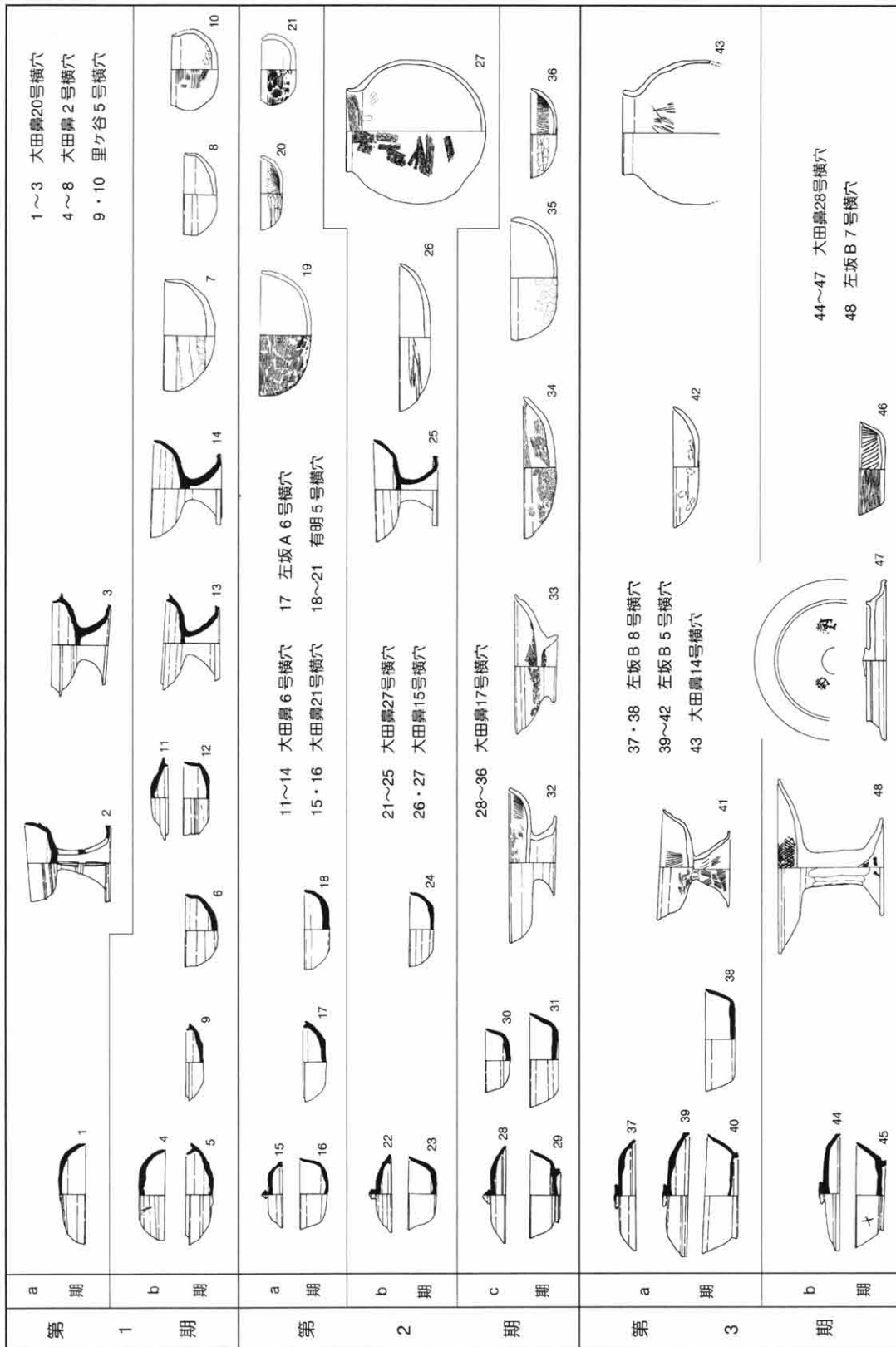
須恵器では、蓋A・杯Aが見られなくなり、蓋B aと杯B各種、杯Cが主体となる。高杯もB bのみである。杯B aの多くは、杯Cと同一の横穴墓からは出土しない。同一横穴墓からの出土例である有明5号横穴でも追葬と考えられる。このことから、杯B aと杯Cは同じ時間を共有しないと考えられる。また、法量のところで検討したように、蓋B a I・杯B a・杯B bのみで構成される場合や、蓋B a II・杯B b・杯B cのみで構成される場合があり、蓋B a IIIや杯Cを含まない横穴墓がある。器種構成の上で、蓋B a IIIや杯Cを含まない点から、これらを含む横穴墓とは区別できる。したがって、蓋B a I・杯B a・杯B bを主体とするグループ(左坂A 6号横穴・大田鼻21号横穴など)、蓋B a II・杯B b・杯B cを主体とするグループ(大田鼻27号横穴など)、蓋B a II・蓋B a III・杯B b・杯B c・杯Cを主体とするグループ(大田鼻17号横穴・有明1号横穴など)に分けることができる。つまり、第2期は、須恵器蓋B aの法量差を基本とし、その器種構成からみれば、a～cの3小期に分けられる。これは、有明横穴群の報告において、有明5号・8号横穴出土資料から有明1～3段階を設定されたのにはほぼ対応すると考えられる^(注17)。

土師器では、第1期に見られた杯A・椀Aに加えて、新たに杯B・皿Aが大半の横穴墓で認められるようになる。また、一部ながら蓋A・蓋B・脚台付皿A・脚台付皿B・甕A・甕Dなどが認められる。このように土師器の器種増加が顕著に認められるのが、器種構成上の第2期の特徴である。このうち、脚台付皿A・Bおよび甕Dについては、須恵器蓋B a IIIと杯Cとともに共存している例が多い。杯A I・A IIともに、第2期でおおむね消滅するようである。少数しか出土していないが、蓋A・B、脚台付皿A・Bは第2期のみみられる。

(3)第3期

須恵器蓋C・杯B c・杯C、土師器杯A・杯B・杯C・高杯B・高杯C・蓋C・甕A・甕Dなどがある。須恵器の供膳具が非常に少なくなり、高杯もみられなくなる。このため、須恵器からみると横穴墓相互の検討が困難になるとともに、器種の消長もつかみにくくなる。第3期では、左坂B 8号横穴において、蓋Cにまじって蓋B a IIIが見られる(ただし、追葬とは考えない)ことから、同横穴墓が他の横穴墓にくらべて第2期の横穴墓に近い時期に位置づけられる。

土師器も須恵器同様、まとまりがあるものが少なくなるが、器種数は比較的多い。くわしくみると、第2期にも認められる杯B・皿A・甕Dを含むグループと第3期になって認められる杯C・高杯C・蓋Cなどを含むグループがある。この2者を皿A・杯Bの消滅、杯C・高杯Cの出現という点から、a・bの2小期に分けることができる。杯C・高杯Cとしたものは畿内産土師器、あるいはその模倣とみられるものであり^(注18)、これに対して、杯Bや皿A、甕Dは丹後地域の地域色を示す資料と考える。このことから、第3期を土師器の丹後的土器様相から畿内の土器様相へ変化していく段階と捉えることができるのではないだろうか。

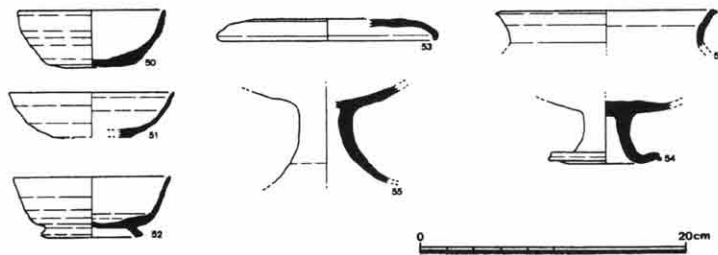


第2図 丹後地域における飛鳥時代から奈良時代前半の土器編年試案

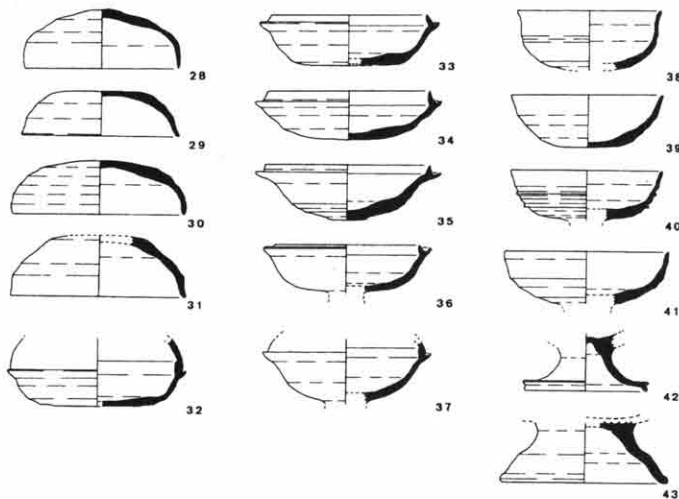
5. 「集落」・「窯」出土土器との比較

前節まで、丹後地域の横穴墓から出土した土器を取り上げ、その変遷について検討を加えてきた。その結果を編年案として提示したい(第2図)。これは「墓」の資料によって作成したもので、以下に、簡単に「集落」や「窯」出土土器との比較を行う。

まず、丹後地域の集落遺跡の調査事例として、大宮町裾谷遺跡^(注19)やエノボ横穴・天徳古墳群^(注20)などで、第1期、もしくはやや先行する時期の土器が出土している。一方、久美浜町こくばら野遺跡^(注21)では、第3期に相当する土器が出土している。しかし、第2期の土器を出土する遺跡は確認できない。さらに、こくばら野遺跡では、未実見であるが、第3期の土器群中に杯B aに分類できる須恵器が含まれている(第3図50・51)。



第3図 こくばら野遺跡竪穴式住居跡10出土須恵器実測図
(注22文献より)



第4図 堤谷1号窯灰原第V層(上段)・第III層(下段)出土
須恵器実測図(注23文献より)

次に、窯跡資料として、久美浜町堤谷1号窯跡^(注23)がある。同窯跡では灰原の上層(第III層)や窯体内から、第3期に相当する須恵器が出土したが、灰原下層(第V層)からは第1期に相当する須恵器が出土している(第4図)。この灰原は、報告によると、連続して堆積しており、第1期から第3期の須恵器へ急激に変化した可能性を示し、第2期の須恵器の存在する余地が認められない^(注24)。

以上のように、「集落」や「窯」出土土器に第2期の遺物が少ない点に注意される。もちろん調査例が少ないことから、かならずしも実態を反映していない可能性もあるが、横穴や古墳などの「墓」から出土する第2期の遺物の量に比べれば、非常に少ない。また、厳密には丹後地域とは呼ばないが、近接する舞鶴市浦入遺跡群の調査でも、第1期や第3期の土器群は多く出土するが、蓋B aとそれ

にともなう第2期の土器群は非常に少なかった。^(注25)それでは第2期の土器が「墓」に多く、「集落」・「窯」に少ないことは何を示すのであろうか。ここでは1つの仮説として、筆者の意見を述べておきたい。

すなわち、橋本氏が述べられたように、「古墳・横穴には恣意的に選ばれた器種のみが副葬され」た結果であろうと考える。つまり、畿内地域との関係を強めた横穴墓の被葬者が、畿内地域で先進的に用いられている器種構成、特に須恵器と筆者は考えるが、それを、みずからの墓に選択的に副葬したのではないか。一方、こくばら野遺跡にみられるように、蓋を伴わない須恵器杯Baのような器種が第3期においてもみられ、須恵器蓋Ba・杯Bbに代表されるような畿内の色彩の強い土器群は、丹後地域の集落においては非常に少なかったのではないだろうか。

6. まとめ

丹後地域における古代前半期(飛鳥・奈良時代)の土器編年について、この数年間考える機会があった。本稿では、丹後地域における横穴墓出土土器を取り上げ、その変遷を明らかにした。検討資料の数は決して十分とはいえないが、丹後地域におけるこの時期の土器様相の変化の一端を示すことができたと思う。しかし、その一方で、「墓」出土土器、「集落」出土土器、「窯」出土土器と区別して比較すると、「墓」出土土器の特異性、すなわち「墓」出土土器の編年が「集落」・「窯」出土土器による場合と、必ずしも一致しない可能性が指摘できるという、新たな問題点も明らかになった。また、実年代については、あえて触れなかった。これは、当該資料中に実年代を推定するための資料がみられないことによる。同様に、畿内地域との併行関係についても述べなかった。

以上の点については、今回くわしい検討を行わなかった「集落」・「窯」出土土器とともに、機会を改めて検討することにしたい。

(つつい・たかふみ=当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 本稿でいう丹後地域とは、律令制のもとで成立した丹後国のうち、加佐郡を除く、与謝郡・丹波郡・竹野郡・熊野郡の4郡に相当する地域を指すものとする。

注2 筒井崇史「丹後地域における奈良時代の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2001 以下、別稿といえは本論文を指す。

注3 筒井崇史「飛鳥～平安時代の土器」(『浦入遺跡群』京都府遺跡調査報告書 第29冊)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2001

注4 本稿を含む上記の文献はいずれも2001年刊行であるが、執筆時期に違いがあり、浦入遺跡群報告書→別稿→本稿の順となる。三者はいずれも個別テーマごとに執筆したものであるが、全体としては、丹後地域における古代の土器編年を明らかにすることを目的としている。

注5 第16回両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流会における同氏の発表による。発表内容は、その後、下記文献に収録された。

橋本勝行「丹後における7世紀の土器」(『太邇波考古』第12号 両丹考古学研究会)1999

注6 増田孝彦ほか「有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊(財)京都府埋蔵文化財調査

- 研究センター) 1987
今田昇一・橋本勝行ほか「有明横穴群」(『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書 第14集 大宮町教育委員会) 1998
- 注7 岡田晃治「大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注8 石崎善久「里ヶ谷横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注9 肥後弘幸ほか「左坂横穴」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』 京都府教育委員会) 1993
竹原一彦「左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第71冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注10 筒井崇史「左坂横穴(B支群)」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
なお、③～⑤の横穴墓群については、築造された斜面が異なるが同一の丘陵に営まれたもので、かつて簡単な検討を行ったことがある(筒井崇史「大宮町左坂横穴群の検討」(『京都府埋蔵文化財情報』第57号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995)。
- 注11 本稿で用いる器種分類は、別稿などで述べたものと基本的には同じである。ただし、横穴墓出土土器の実態に合わせて、新たな器種設定を行ったり、分類基準を一部改めたものがある。
- 注12 杯Bについては高台を有さないものとして1つにまとめたが、製作技法の点から、杯B aと杯B b・B cは別の器種として分類すべきかもしれない。製作技法にかかわる問題点は今後の課題としたいが、その結果、別の器種として改めて設定し直す可能性があることを記しておく。
- 注13 兵庫県教育委員会『七日市遺跡(I)―第3分冊―』(1991)などにおいて杯Iとして報告された器種とはほぼ同一のものを指す。
- 注14 椀X、もしくはそれに類似した器種は、横穴墓のみならず、久美浜町湯船坂2号墳・丹後町高山12号墳・同上野1号墳・加悦町滝岡田古墳などで確認することができる。しかし、丹後地域においては、その出自や消長についてほとんど明らかでない。しかし、周辺地域では、園部町壺ノ谷13号窯などで類似した器形の出土例がある。ただし、口径が13.4cmと、大田鼻6号横穴出土例に比べやや法量が大きく、両者の関係はなお明らかにしがたい。
- 注15 別稿314・315頁の法量分布図参照。1つの窯跡において2ないし3の法量が認められる。これを法量による器種分化として捉えた(316・317頁)。
- 注16 山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」(『古代文化』第40巻第6号 (財)古代学協会) 1988
- 注17 注6 今田・橋本ほか文献参照
- 注18 林部 均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会) 1992
- 注19 筒井崇史「裾谷横穴・遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注20 細川康晴「エノボ横穴」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1995)』 京都府教育委員会) 1995
- 注21 細川康晴「天徳古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』 京都府教育委員会) 1997
- 注22 森島康雄「こくばら野遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注23 肥後弘幸「堤谷窯跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』 京都府教育委員会) 1993
- 注24 ただし報告者は上層を白鳳時代から奈良時代、下層を古墳時代末と考えている。
- 注25 注3 文献参照

10. 桑原口遺跡第5次

所在地 京都府宮津市喜多小字桑原口
調査期間 平成12年11月15日～12月22日
調査面積 約300m²

はじめに 今回の調査は、鳥取豊岡宮津自動車道建設に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。宮津市域南部には大江山塊から流れ出す大手川によって形成された宮津谷が広がる。桑原口遺跡は、宮津谷ほぼ中央部の大手川東岸、河口から約2 km南側に位置する。

調査概要 調査地は、北近畿タンゴ鉄道の軌道の西側に隣接する地点である。今回の調査は、建設予定地内の遺構・遺物の残存状況や広がりを確認する目的で、自動車道の側道予定地部分に6か所のトレンチを設定して実施した。今回の調査では、ほとんどのトレンチで溝状遺構・杭列・土坑・柱穴等の遺構を検出した。遺物も多量に出土したが、そのほとんどが弥生時代後期から古墳時代初頭頃にかけての土器である。それ以降の時期の遺物のごくわずかである。

遺構は、調査範囲が限られているため、その性格を明確にしがたいものが多い。溝状遺構には、調査地外にのびるので全体の形状は不明であるが現況の検出状況では「コ」字状にめぐむものや、完形の有孔鉢が出土したものがある。「コ」字状の溝状遺構は、竪穴式住居跡の周囲を囲む溝もしくは方形周溝墓の周溝の一部とも考えられるが、その重なり方からみて、住居の周囲を囲む排水溝とみる方が妥当か。今回検出した遺構の多くは、集落跡に関連するものである可能性が高い。

まとめ 調査地は、東側の丘陵裾部から西側に向かって徐々に低くなる地形部分に位置する。今回の調査では遺構の存在する可能性が低いと考えられていた西側の低地部分でも遺構を検出しており、遺跡範囲が、従来考えられていたよりも西側に広がる可能性がある。



(引原茂治)

調査地位置図(1/50,000)

ひがしやま 11. 東山遺跡第2次

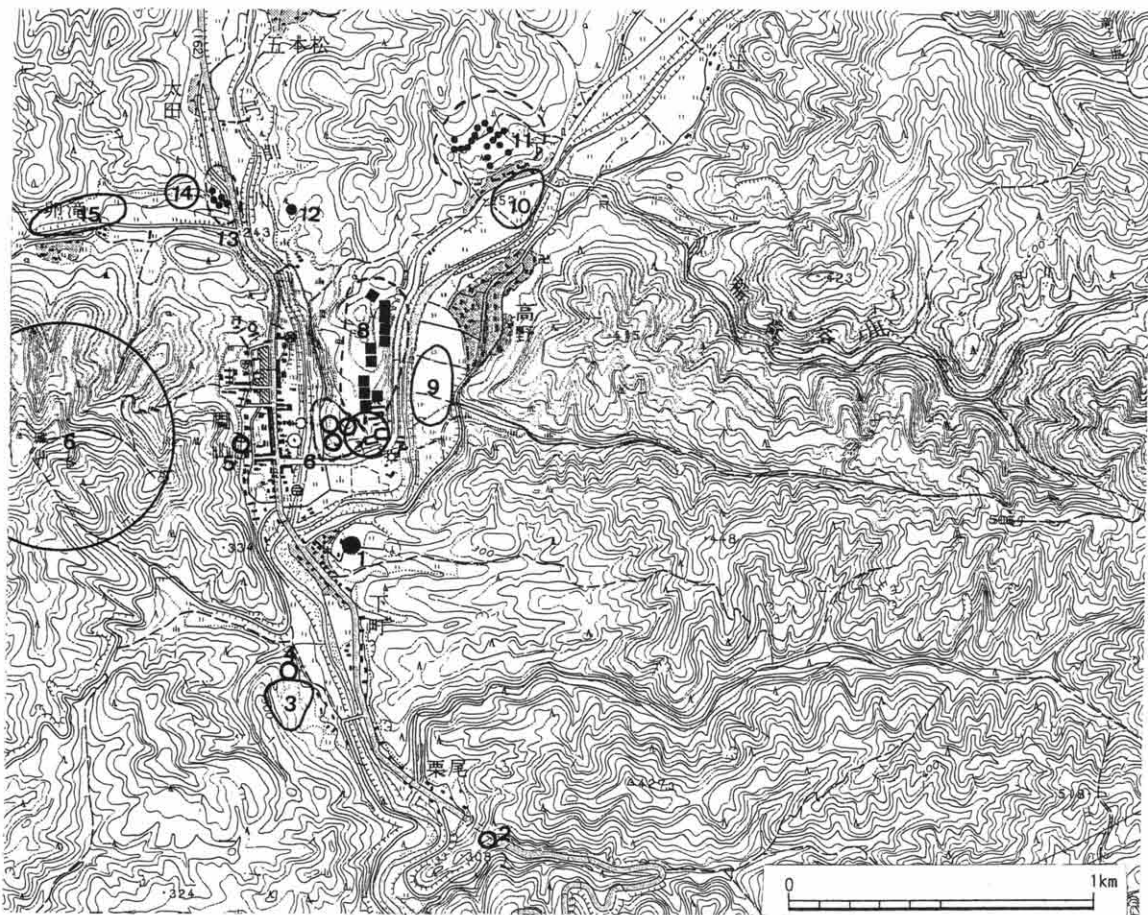
所在地 京都府北桑田郡京北町大字周山

調査期間 平成12年6月1日～11月16日

調査面積 約2,000m²

はじめに 今回の調査は、国道162号周山バイパス建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査は平成11年度に行った試掘調査の成果をもとに行い、調査区は現有の町道をはさみ、北をA地区、南をB地区とした。東山遺跡は桂川上流が弓削川と合流する周山に位置している。遺跡の北の桂川対岸には周山廃寺、周山古墳群があり、南西には周山瓦窯がある。

調査概要 今回の調査によって、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構を検出した。古墳時



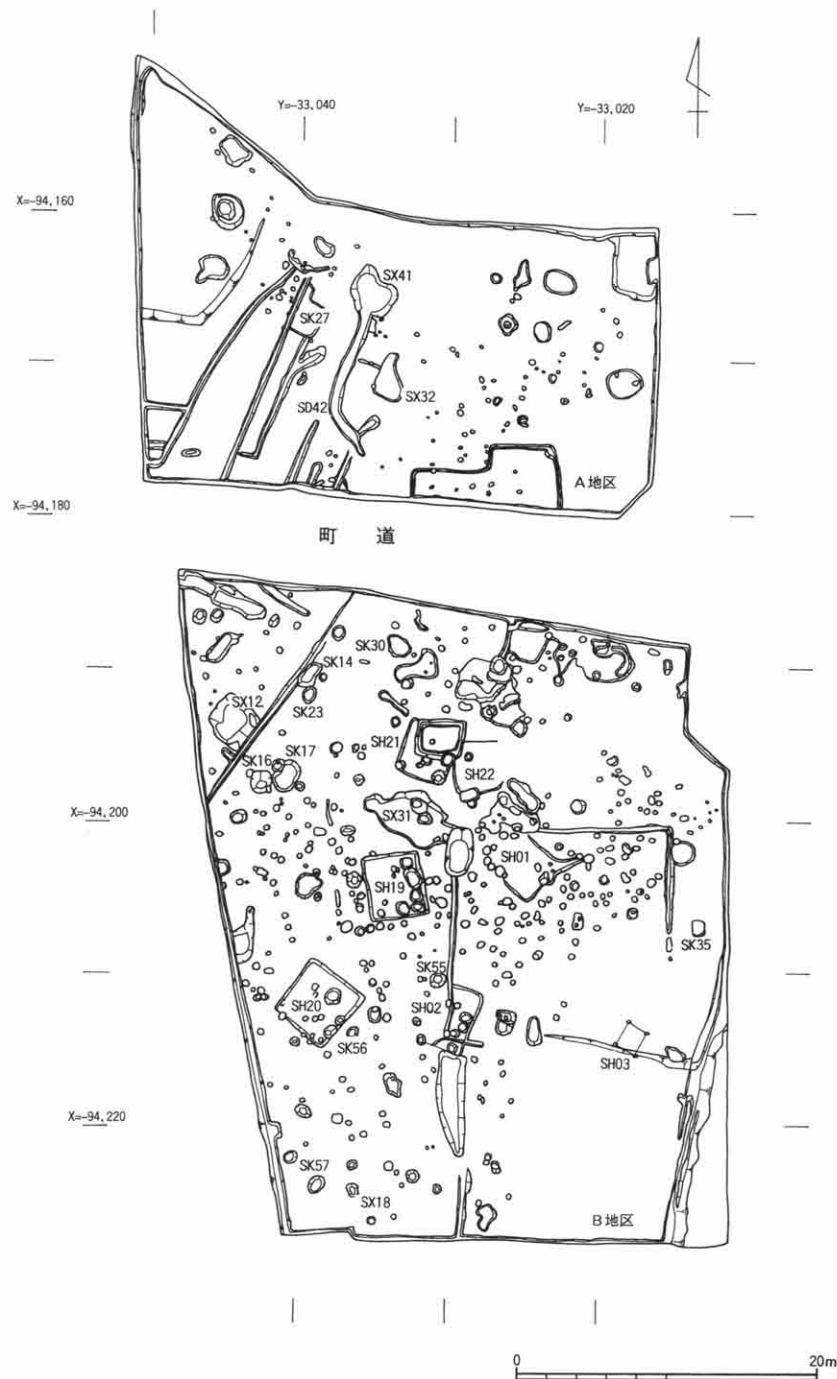
第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図

- | | | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|
| 1. 東山遺跡 | 2. 小栗尾経塚 | 3. 周山窯跡群 | 4. 周山経塚 | 5. 慈眼寺経塚 | 6. 高梨経塚群 |
| 7. 周山廃寺跡 | 8. 周山古墳群 | 9. 祇園谷遺跡 | 10. 殿橋遺跡 | 11. 折谷古墳群 | 12. 古墳 |
| 13. 大年古墳群 | 14. 窯跡 | 15. 卯滝谷遺跡 | | | |

代の遺構には竪穴式住居跡(S H01・02・03・20・21・22)、土坑、柱穴がある。竪穴式住居跡は合計6か所検出されており、いずれも5世紀後半のもので、明確な竈跡を持つものはなかった。また大形のものは支柱穴が4か所、小形のものは2か所あるいは検出できなかった。飛鳥時代の遺構としては、竪穴式住居跡S H19の1か所のみが検出されたが、遺物はきわめて少ない。奈良時代には土壙墓と考えられる土坑S K16・17がある。昨年度同様、平瓦が数点出土したが、その用途については不明である。中世の遺物は、B地区の北部からA地区に多く見られた。土坑(S K23・27・35)からは瓦器椀、土師皿、鉄刀などが出土した。遺構に伴うものは13世紀前半のものである。

包含層中からの出土遺物には、昨年度同様、多量のチャート製石器が出土した。石刃技法によって作られたと考えられる剥片もあり、旧石器時代の遺物である可能性も指摘できたため、深掘りトレンチを設けて調査したが、黄褐色土から石器は出土しなかった。また石匙・石鏃が出土し、今年度の調査ではじめて縄文土器片が出土していることから縄文時代の石器である可能性が高いことがわかった。押引文が器表面に認められ、縄文時代早期末～前期の土器と考えられる。

(中川和哉)



第2図 検出遺構配置図(1/500)

12. 池^{いけがみ}上遺跡第7次

所在地 京都府船井郡八木町池上
 調査期間 平成12年6月21日～11月8日
 調査面積 約2,000m²

はじめに 今回の調査は、平成12年度の府道亀岡園部線道路整備事業に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受け調査を実施した。池上遺跡は、八木町内にある筏森山の東側に所在する弥生時代から中世の集落・墓地が確認される遺跡である(第1図)。調査対象地は、平成10年度の第5次調査区の北側に隣接した地点から延長北約270mの路線部分にあたる。対象地の北側では、遺構の有無の確認のため3か所の試掘調査(約400m²)を実施した。南側は、第5次調査によって、遺構が北側にも広がることを確認されたため、面的な調査(約1,600m²)を実施した(第2図)。調査概要は、以下の通りである。

試掘トレンチ 調査対象地の北側で3か所の試掘トレンチを設定した。調査の結果、ピットや溝などの遺構を検出した。しかし、遺構の密度は希薄で時期を特定する遺物は出土しなかった。上層の遺物包含層からは、平安時代前期末～中期(9～11世紀)の遺物が少量出土した。遺構は試掘トレンチAの北端部からB・Cにかけて散在する。

第1トレンチ 遺構は、トレンチの南側半分に集中し、北側では、耕作溝以外は検出できなかった。トレンチの南端部で検出した総柱建物跡1は、東西2間・南北3間以上で、方位はやや北西に傾く。建物跡は、後世の溝31によって南側の柱穴2基が壊される。北西に斜行する溝13からは、8世紀末～10世紀末に属する遺物が出土した。総柱建物跡1の北側で検出した土坑24は、数



第1図 調査地位置図(1/25,000)

度にわたる掘削がみられ、埋土からは8世紀前半～9世紀初めに属する土器が出土した。そのほかに、縄文時代の石鏃や弥生土器片、7世紀末の須恵器などが混入した遺物も出土した。また、中世の遺構も検出し、須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦器・黒色土器・陶器などの遺物が出土した。

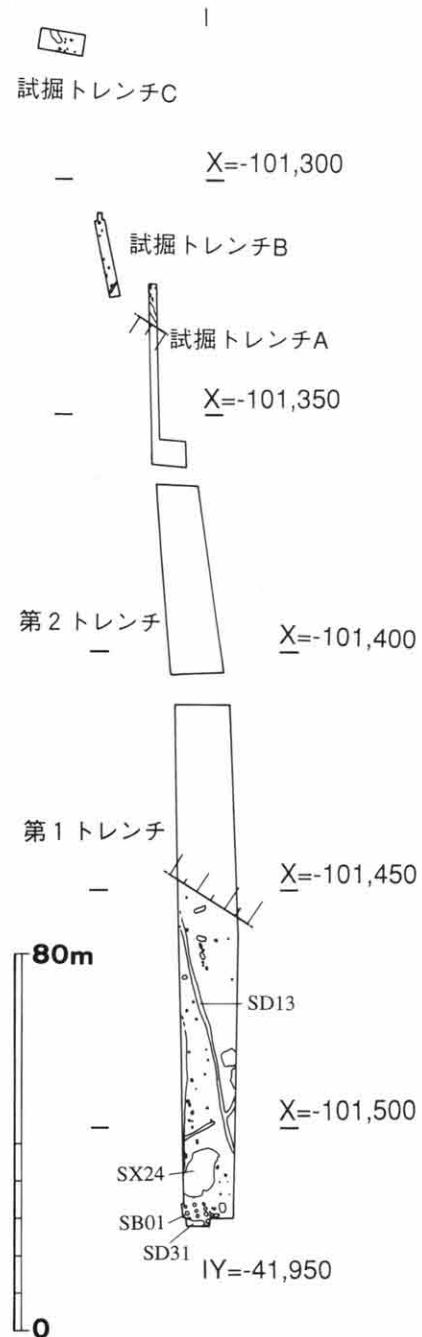
第2トレンチ 繰り返し遺構面の精査を実施したが、遺構は確認できなかった。南端部で断ち割りをした結果、黒灰色粘質土が約1.4mの厚さで堆積し、その直下で暗黄灰色粘質土層を確認した。暗黄灰色粘質土面は西に傾斜している

ことも分った。

まとめ 調査地の北側で試掘調査を実施し、希薄であるが遺構を検出し、この地点にも遺構が分布することが確認できた。また、調査地の中央(120m間)では、断ち割り調査と試掘トレンチAの北側と第1トレンチの北側の黒灰色粘質土の堆積状況から、自然流路が存在すると思われる。調査地の南側は第5次調査区の北側にあたり、弥生・古墳～平安時代の遺構の北への広がりが予想されたが、弥生時代や古墳時代の遺構はなく、平安時代前期の遺構や中世の遺構を検出した。平安時代の遺構は、第1トレンチの南半部に集中している。総柱建物跡1は、2間×3間以上の建物跡で、第5次調査で検出された建物跡と同じ方位を持つことから、この一帯には数棟の倉庫が建てられていたと想定できる。土坑24についても、性格は不明であるが、出土遺物から総柱建物跡1や溝13とほぼ同時期の遺構であると思われる。

検出した平安時代の遺構の範囲は、第1トレンチの南側で集中し、中央部で確認した自然流路とみられる地形で遺構は途切れる。過去の調査から遺構の変遷を整理すると、池上遺跡の遺構は時期が新しくなるにつれ、北へ移動していったことがわかる。また、自然流路によって、池上遺跡の範囲の北限が確認できたと考える。そして、自然流路より北側では希薄ながら遺構が存在することが確認できた。今後の周辺の遺跡調査の成果に期待することとする。

また、縄文時代の石鏃が出土していることから周辺に縄文時代の遺跡が存在する可能性が指摘できる。



第2図 検出遺構配置図

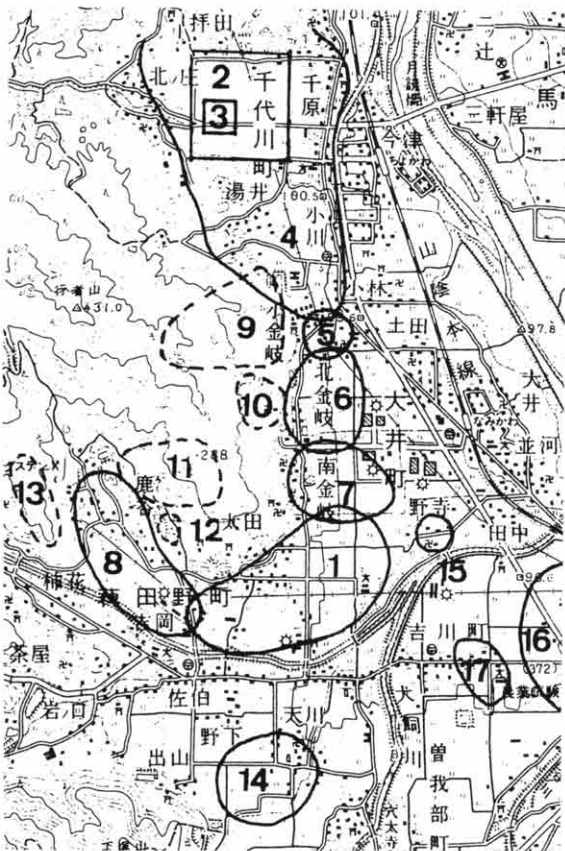
(村田和弘)

13. 太田遺跡第13次

所在地 京都府亀岡市葺田野町字太田
 調査期間 平成12年5月25日～平成13年1月26日
 調査面積 約4,200m²

はじめに 太田遺跡の発掘調査は、府営ほ場整備に伴い京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

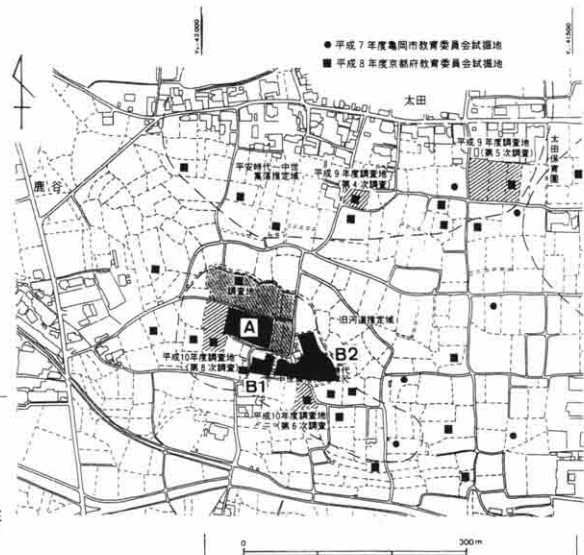
調査概要 当該発掘調査では、A地区、B1地区、B2地区において古墳時代から室町時代にかけての遺構、遺物を検出した。この調査成果は、既往の成果と符合しており、各時代の遺構の広がりをも面的に確認できた意義は大きい。



第1図 太田遺跡および周辺遺跡分布図(1/50,000)
 1. 太田遺跡 2. 丹波国府推定地 3. 桑原廃寺
 4. 千代川遺跡 5. 馬場ヶ崎遺跡 6. 北金岐遺跡
 7. 南金岐古墳群 8. 鹿谷遺跡 9. 小金岐古墳群
 10. 北金岐古墳群 11. 鹿谷古墳群 12. 鹿谷池田古墳群
 13. 葺田野西山古墳群 14. 天川遺跡 15. 野寺廃寺
 16. 余部遺跡 17. 穴川遺跡

古墳時代の遺構としては、A地区、B1地区の竪穴式住居跡群やB2地区の掘立柱建物跡などがある。竪穴式住居跡の出土遺物は整理中であり、詳細な時期は明記できないが、B2地区の掘立柱建物跡を構成する柱穴からは、完形率の高い陶器編年TK47型式の須恵器が出土している。当該地区一帯は、古墳時代の集落の縁辺部である可能性が高い。

奈良時代および平安時代の遺構としては、



第2図 A・B1・B2トレンチ配置図

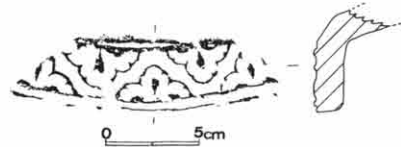


第3図 A地区遺構配置図



第4図 B1地区遺構配置図

A地区、B1地区において梁間2間×桁行5間の掘立柱建物跡を検出した。建物の重複や主軸がわずかにずれることから、これらの建物が同時に併存したとは考えられない。しかし、B1地区の掘立柱建物跡3、5のように主軸を一にする掘立柱建物跡が配置されている点や掘立柱建物跡自体の規模などから、公的な機能を有していた可能性が指摘

第5図 B1地区ピット378出土
軒平瓦実測図

できる。なお、第5図に示した瓦は、B1地区ピット378から出土した宝相華文軒平瓦で、線刻による半截花文を交互に配している。同范資料については現時点では明らかにし得ないが、亀岡市篠町に所在する三軒家窯跡群から宝相華文軒平瓦の出土が報じられている。公的機能を有した可能性を傍証する資料である。今後、系譜関係などの研究がまたれる。

鎌倉時代および室町時代の遺構としては、掘立柱建物跡とそれらを圍繞する方形区画溝、井戸、土坑などがある。掘立柱建物跡を構成する柱穴の規模は、律令期の建物の柱穴に比べて小規模であるが、総柱に復原できる掘立柱建物跡も含まれる。また、井戸には、底面に曲物を据える井戸が多く、上位に石組みや縦板を配する構造が見られる。特に、A地区井戸62は、上位の石組みが自重により軟弱な地山に沈み込まないように、方形に組んだ胴木を底面に配している。同時期の井戸にあって希少な事例である。なお、各井戸からは、龍泉窯産の青磁碗や瓦器、土師器などが多く出土しており、編年的研究をすすめる上で基準資料になる。

最後に、考古学的な所見ではないが、各地区において、地震に伴う噴砂および断層が見られる。現時点では慶長元(1596)年の伏見地震に伴う可能性が指摘されている。この地震により当該調査で検出した井戸の石組みが、一部崩落ないし歪んだ可能性があり、地震の強さを示している。

なお、掲載した第2～5図は、平成13年1月24日に開催した現地説明会資料からの転載である。詳細は、後日、発刊される概要報告を参照していただきたい。

(小池 寛)

14. 百々遺跡

所在地 京都府乙訓郡大山崎町円明寺字夏目
 調査期間 平成12年 8月21日～12月22日(中断期間を含む)
 調査面積 650m²

はじめに 今回の発掘調査は、中央自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴い、日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した。発掘調査は、平成2年度に当調査研究センターが発掘調査を行った西国街道東辺から、中央自動車道西宮線の南辺部に沿って、東側約120mにわたって3か所にトレンチを設定し、実施した(第2図上参照)。

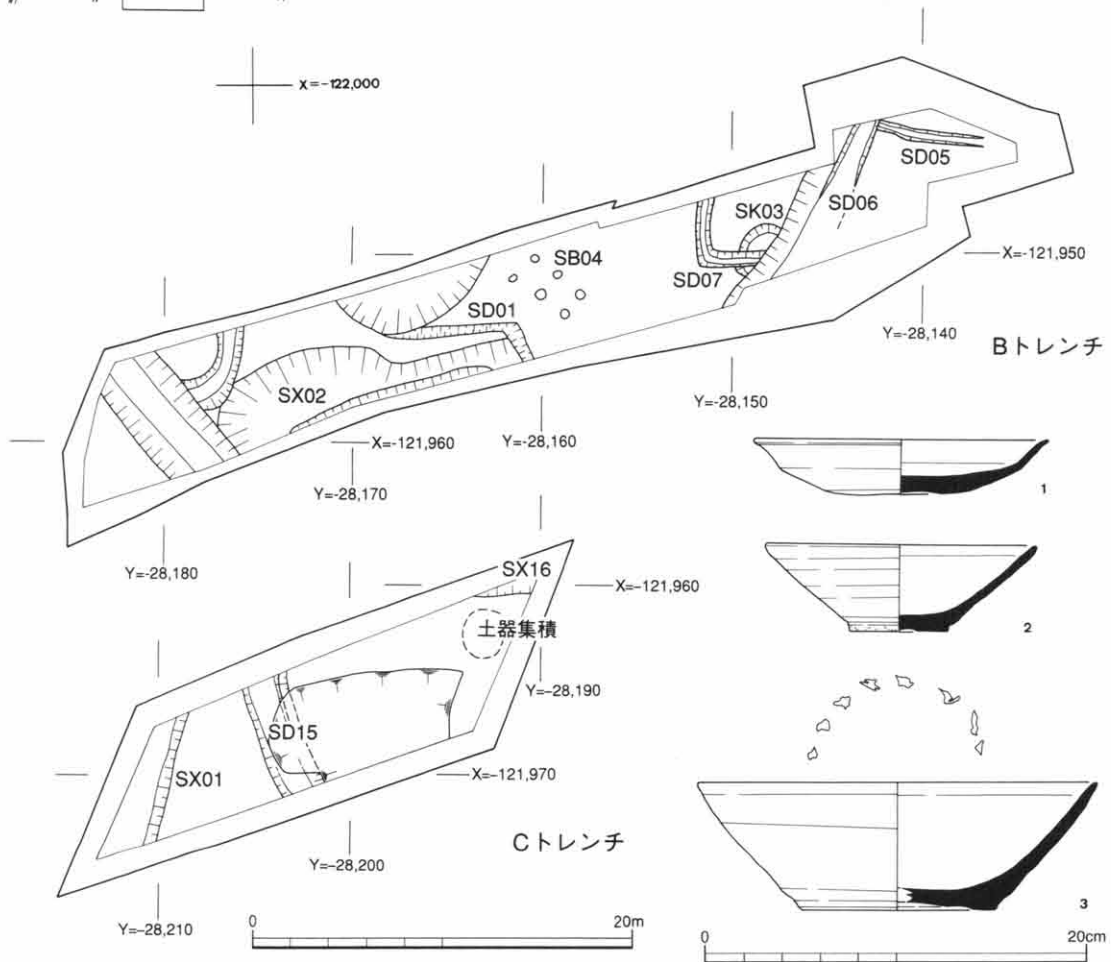
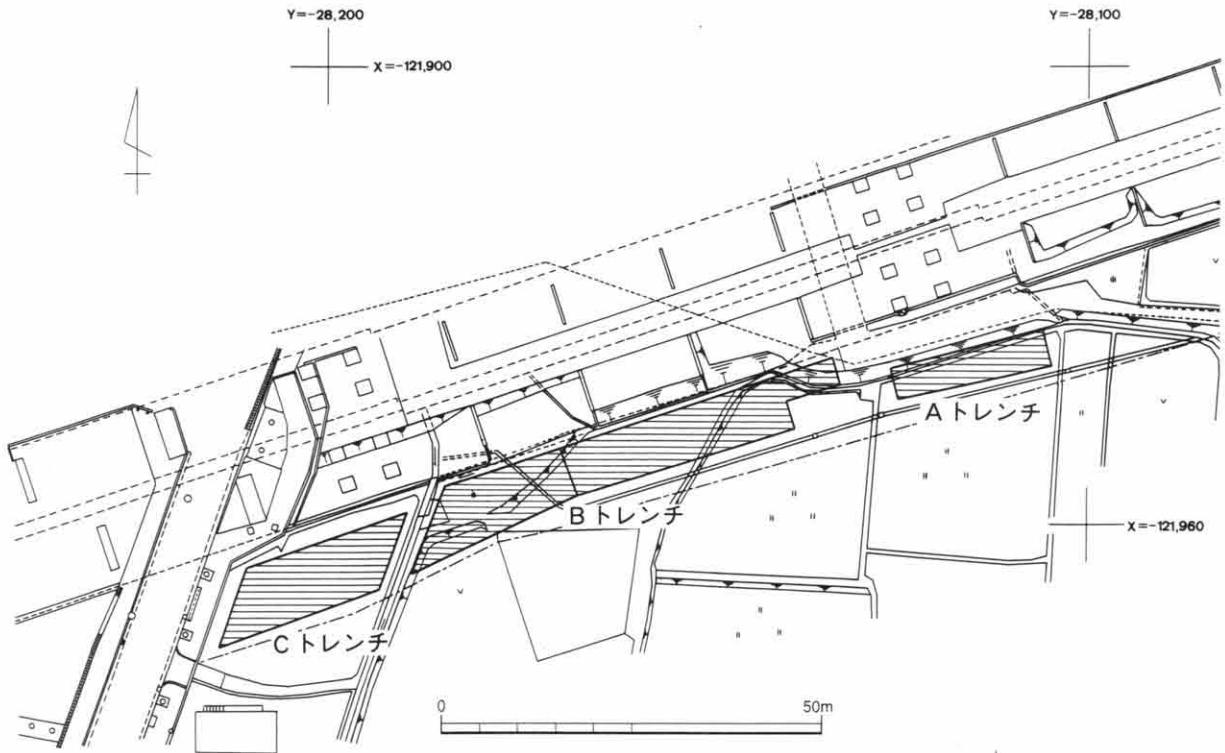
調査の概要 Aトレンチでは、表土下1～1.5mまで現中央自動車道西宮線建設時に構築したコンクリート側溝などの埋設物や埋土がみられ、その下層からは2枚の水田面を検出した。さらにその下位は、谷地形特有の土砂堆積状況であった。Bトレンチでは、掘立柱建物跡・溝・土坑・杭列などを調査した。掘立柱建物跡S B04は、1間×2間の小規模ながら、柱穴内から土師器皿・瓦器椀が伴出し、平安時代後期頃に比定できる。落ち込みS X02は南方に向かって緩やかに傾斜する。その中間層より中国越州窯青磁皿・椀(第2図下1～3)と共に、土師器高杯5個体以上、平瓦および丸瓦片・須恵器大甕片など平安時代中期頃の遺物が、また土坑S K03からは奈良時代の土師器杯・製塩土器・須恵器杯が出土した。西端部には南北走する古墳時代の自然流路があり、その他の遺構には溝や杭列などがある。Cトレンチでは、中央部に大きな現代の攪乱坑があつて遺構が破壊を被っており、不明な点が多いが、平安時代中期頃の緑釉陶器・須恵器・土師器などの土器類や軒丸瓦、平・丸瓦などを包含したS X01・16などがあり、下層遺構として布留式土器を包蔵したS D15や古墳時代中期の土師器(甑を含む)の集積部も存在していた。その他に、多数のピットや集石(S X01)もあつた。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

まとめ 今回の調査では、西国街道の東側地域の土地利用の一端を把握できた。東方に位置する算用田遺跡に向かって、時代と共に徐々に耕作面などを拡張していった様相が明確になった。その一方、西国街道側では、古墳時代前期・奈良時代・平安時代中期・同後期と、断続的ではあつたが、生活の場として大いに活用されていたことがうかがい知れた。

(松井忠春)



第2図 トレンチ配置図および検出遺構・遺物実測図

15. 佐山遺跡第2次(A-2地区)

所在地 京都府久世郡久御山町佐山小字新開地・佐古小字外屋

調査期間 平成12年7月10日～12月22日

調査面積 約3,600m²

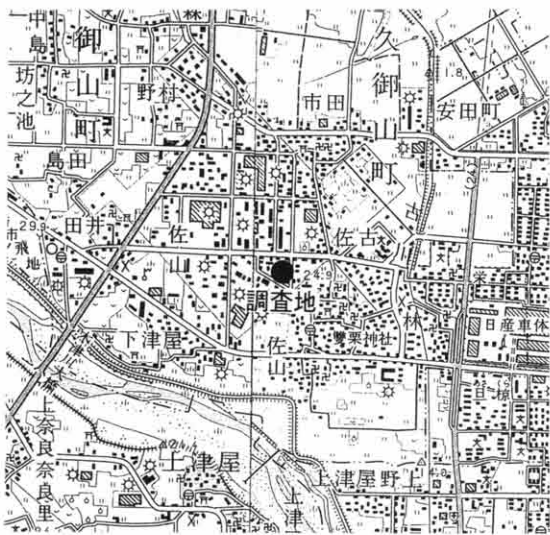
はじめに 佐山遺跡は、木津川右岸の沖積地にあり、旧巨椋池の南に位置する複合遺跡である。佐山遺跡では、平成9年度に、第二京阪自動車道および国道1道京都南道路建設に伴い、路線計画地内で試掘調査を行った。その結果、平安時代後期～古墳時代前期の遺構群が検出されたため、平成11年度に、北部のA-1地区の本調査を実施した。今回の調査は、A-1地区に隣接する南側のA-2地区の調査を対象としたものである(第2図は、A-1地区とA-2地区の平面図を合成して作成)。本調査は、国土交通省の依頼を受けて実施した。

調査概要 現在の地表下約2.5m(海拔約10.6m)付近で、平安時代後期～鎌倉時代頃の遺構群および弥生時代後期末～古墳時代中期の遺構群を検出した。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構群としては、トレンチ東部で、南北方向に直線的にのびる溝群を検出している。溝幅は、いずれも検出面で約1m前後・深さ約0.3～0.5mを測る。前年度に調査したA-1地区東部で検出した南北方向にのびる溝群と連続するものであり、規模も大きいことから、久世郡条里に伴う道路および側溝とみられる。溝は重複して掘削されたものもあり、側溝がほぼ同一の場所で、幾度か付け替えられた状況が観察される。平行する大きな2条の溝SD03・SD04の間隔は、溝中心間で約2.5mを測り、溝で挟まれた部分が、ある時期の路面と推定

される。溝のなかからは、11世紀後半頃の土師器皿や瓦器碗が出土した。また、トレンチ中央から西部では、東部の溝群の検出面から約60cm高い位置で、幅約25cm・深さ約5～15cmの多くの浅い溝群を検出した。これらは、東西・南北に軸線を揃えており、畠作にともなって掘削された畝溝とみられる。

弥生時代後期～古墳時代の遺構群は、トレンチ東部では、中世の道路側溝とみられる溝群によって大きく削平されていたが、トレンチ中央部および西部では比較的良好に遺存していた。検出した主な遺構は、弥生時代後期末～古墳時代中期の竪穴式住居跡24基、弥生時代終末期～

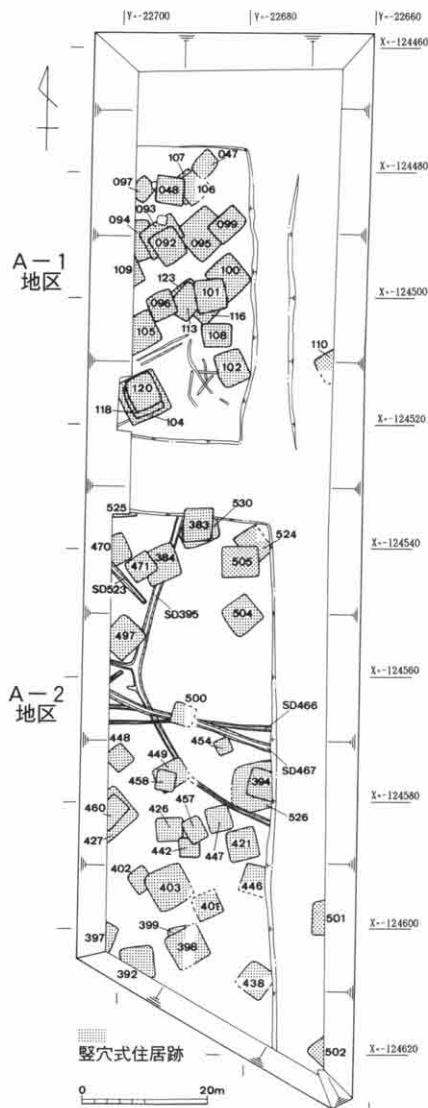


第1図 調査地位置図(1/50,000)

古墳時代初頭の溝群である。検出した竪穴式住居跡のうち、最も古いものは、弥生時代後期末～末の多角形住居であり、床面から小形壺・高杯などの土器が出土した一部削平されているが、平面形は、五角形となる可能性が高い。竪穴式住居跡の多くは、弥生時代終末期～古墳時代前期に帰属するもので、いずれも方形住居である。このうち古墳時代初頭と推定される小形の住居跡1基は、ベット状遺構を持つ。また今回検出した住居跡群のなかで、4基には造り付け竈が設置されている。竈をもつ住居跡は大きく2時期に分かれる。3基は布留式中段階～新段階の土器を出土し、構築時期は4世紀後半～5世紀前半と推定される。また残る1基は、TK23～47型式の須恵器を出土しており、5世紀後半～末と推定される。前者の竈は、竪穴式住居跡のコーナー部分に取り付けられるものと、壁体中央部に設置されるものがあり、後者の竈は壁体の中央部に取り付けられている。前者の竈の中には、布留式甕の底部を打ち欠き、支脚として転用したものもある。一方、トレンチ中央部には、ゆるやかに弧を描きながら、北部から東部へのびる溝SD395と、東西方向に交差して直線的にのびる溝SD466・SD467とがある。溝SD395は、幅約0.7～1.0m・深さ約0.4～0.6mを測り、長さ約60mにわたって検出した。出土遺物が少なく、時期決定は難しいが、切り合い関係から、おおよそ弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と推定される。また溝SD466もほぼ同様の時期のものであり、庄内式併行期の壺・甕などの土器群が一括して出土している。トレンチ北東部で部分的に検出した古墳時代初頭の溝SD523からは、高杯・小形器台などとともに、胎土や形態から讃岐産と推定される大形複合口縁壺の口縁部が出土している。

まとめ 平安時代後期～鎌倉時代の遺構としては、久世郡条里にはほぼ合致する里道側溝や、畑地にとまなう素掘り溝群を検出した。調査地東部を南北に貫く側溝を伴う道路状遺構は、幅2.5mとやや狭く、久世郡条里の復原では坪境と推定される。また弥生時代後期～古墳時代の遺構では、弥生後期末～古墳時代中期の多数の竪穴式住居跡を検出した。前年度調査した北側のA-1地区と合わせると、約59基の竪穴式住居跡を検出しており、この一帯が古墳時代初頭～前期を中心とする大規模な集落跡であることが判明した。古墳時代前期後半～中期初頭の竪穴式住居跡には、住居内に造り付けの竈をもつものがあり、山城地域における導入期の竈として注目される。

(野々口陽子)



第2図 A-1・A-2地区遺構配置図
(弥生～古墳時代遺構面)

16. 木津川河床遺跡第12次

所在地 京都府八幡市八幡焼木
 調査期間 平成12年9月7日～平成13年1月12日
 調査面積 約500m²

はじめに 木津川河床遺跡は、御幸橋周辺から、木津川の上流へ約2km遡った木津川大橋周辺にまで広がる弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。当調査研究センターでは昭和57年度より断続的ではあるが、主に洛南浄化センター内で発掘・試掘調査を実施し、多くの遺構・遺物が検出されてきている。今回の調査地は洛南浄化センター内でも西端にあたる。北東側で実施した平成10年度の発掘調査で、古墳時代の竪穴式住居跡などが検出され、当時代の遺跡の広がりが予想された。今回の調査では、古墳時代の住居跡は検出されなかったが、埋葬遺構と考えられる土坑、中世の溝、地震痕跡(噴砂)などを検出することができた。

調査概要 掘削の結果、上層遺構として、主に中世(13世紀末～14世紀初め)の畑耕作にともなう溝や地割り溝、さらに正確な時期は検討中であるが、掘立柱建物跡の一部とみられる柱穴を4基検出した。溝内からは土師器皿や瓦器碗・陶器碗などが出土している。溝はすべて南北方向である。また近世初頭の溝もあり、唐津焼の碗などが出土している。

下層遺構は、古墳時代前期とみられる土坑を1基検出した。土坑は不定形な楕円形を呈し、長軸2.8m・短軸0.7m、残存する深さは約30cmである。掘形上面で土師器高杯と器台、埋め土の中



調査地位置図(1/50,000)

層から管玉が1点出土した。埋葬主体部としての棺痕跡は不明であるが、土坑形状や出土遺物などから土壌墓の可能性が指摘される。また、この土坑の東に隣接して1.3m×0.6mの土壌を検出した。出土遺物はないが、同様の土壌と考えられる。

(黒坪一樹)

17. 木津川河床遺跡第13次

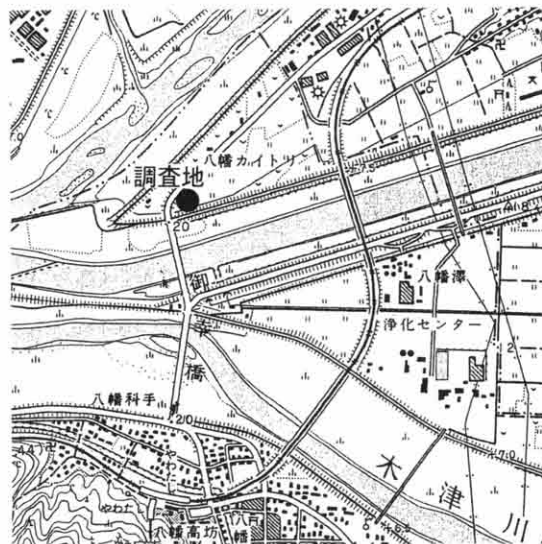
所在地 京都府八幡市八幡溝落・狐川
 調査期間 平成12年10月13日～12月8日
 調査面積 約350m²

はじめに 今回の調査は、京都府土木建築部の依頼を受けて、主要地方道京都守口線改良工事・緊急橋梁建設工事に伴い実施したものである。木津川河床遺跡は、木津川・宇治川・桂川の三河川が合流する八幡市から京都市域にまたがって、遺物の散布が広範囲に確認されているが、沖積地の特性として河川の氾濫の影響による土砂が厚く堆積し、遺跡の状況は必ずしも明らかでない。これまでの発掘調査では、宇治川より南側で弥生時代後期・古墳時代前期・同後期および中世の集落遺跡の存在が確認されている。木津川部分に架かる御幸橋付近は、木津川河床遺跡のなかでも、渇水時期には井戸や柱穴群などが見えており、付近に中世の集落が所在した痕跡がうかがえる。

調査概要 今回の調査地は、三河川が合流する北西の宇治川と桂川に挟まれた水田地帯である。3か所の試掘トレンチを設定して掘削したところ、1か所(3トレンチ)で現在の地表から約3.3m下で、長さ約2m・幅約1mを測る中世墓を検出した。この墓では、瓦器碗を中心に周辺に6点の土師器皿と東海系の皿1点が上向きに並べられ、隣接して白磁碗片と鉄製品が出土した。ここでは、調査範囲が狭いので不明な点もあるが3か所以上の墓が造られていたことが判明した。沖積層からは、土師器皿・瓦器碗・青磁碗・滑石製石鍋を転用した温石や獣骨などが出土した。もう1か所(2トレンチ)でも、現在の地表面から約3.1m下で、板材の残欠が3か所検出され、そのうち1か所で不明鉄製品が出土したので、これらも中世墓と判断した。

まとめ 調査対象地は、当初予想していたよりも沖積層が厚く、安全のため下層は狭い範囲しか調査できなかったが、現在の地表下3m以上の地点で中世墓が発見できた。宇治川以北では、ほとんど調査が実施されておらず、中世にはこの地域が木津川河床遺跡の集落に伴う墓地であることが明らかになったことは大きな成果であろう、

(石尾政信)



調査地位置図(1/25,000)

18. 上津屋遺跡第4次

所在地 京都府八幡市上津屋里垣内
 調査期間 平成12年11月13日～平成13年2月27日
 調査面積 約600m²

はじめに 上津屋遺跡は弥生・古墳・中世の各時期の遺物の散布が見られることで周知されている遺跡である。今回の調査は府営住宅建設事業に先立ち、京都府土木建築部の依頼にもとづき、実施した。なお、調査地は式内社であり、南北朝期の十三重の塔が現存する石田神社旧境内に当たり、江戸時代の絵図に福泉寺という薬師堂が描かれている地点でもある。

調査の概要 調査は4か所にわたって行い、東からそれぞれ第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチ・第4トレンチとした。

検出された薬師堂関連遺構は第1トレンチの西端の土坑S K01、第2・3トレンチの溝S D01、第3トレンチの溝S D02およびS D03である。S D01は石田神社の旧境内の北辺を限る濠の可能性が高く、南側の岸は第2トレンチ内で鍵形に屈曲し、第3トレンチ部分では溝幅が狭まる。S D02はこの溝に直行する方向で伸び、屈曲部へ向かって伸びているが、途中で浅くなって途切れる。S D03はS D02に先行する溝である。それぞれの遺構からは丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦に混じって少量の棧瓦が出土した。またS D01からは18世紀の陶磁器が、S D02からは17世紀の土師皿、S D03からは16世紀の土師皿が出土し、特にS D03の土師皿はほぼ完形のもので、多量に折り重なるようにして出土した。またS D03の最下層からは水晶製の宝珠形の玉飾りが1点出土

した。これは底部に貫通しない穴が穿たれており、何らかの仏具に挿して使う装飾品であると考えられる。

まとめ 上津屋遺跡の調査では薬師堂関連の遺構が検出され、江戸時代の絵図を裏付ける結果となり、具体的な薬師堂の位置もほぼ明らかとなった。また、瓦は13～14世紀の中世面でも検出されており、薬師堂創建時期と十三重の塔の沿革が明らかになるようとしている。

(福島孝行)



調査地位置図 (1/25,000)

舞鶴市^{にょう}女布遺跡採集の^{ゆうぜつ せんとうき}有舌尖頭器

吉岡博之・黒坪一樹

1. はじめに

女布(にょう)遺跡は、舞鶴市字女布小字大所・馬場・大坪に所在する弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡である(第1図)。今回筆者らは、この女布遺跡のある地で洋画家をされている森下一夫氏から、当遺跡内で表面採集された多くの考古学的遺物を見せて頂いた。森下氏が表面採集を始められたのはおよそ1年半前からである。多くの土器や石器のなかでも、氏が特に興味を抱き意識的に採集されていたものは、丹後地方には産出しないサヌカイトを石材とする石器類であった。100点を超える石器類のほとんどは不定形な剝片と碎片であるが、なかには森下氏もすでに認識されていた有舌尖頭器1点と、楔形石器(ピエス・エスキーユ)などがあった。今回はこの有舌尖頭器と楔形石器を取り上げ紹介したい。丹後地方全体を見渡しても、これまでのところサヌカイト製の石器類をまとめて出土する遺跡は発見されていない。また、有舌尖頭器の出土例も丹後半島で3例、舞鶴市内で1例が知られているにすぎず、貴重な発見であると言える。女布遺跡の位置と環境については次に述べるが、南に隣接する綾部市からの谷部をぬけて西舞鶴の市街地に入ってすぐの西側微高地上に展開する遺跡である。現在では広く宅地造成・整備がなされ、微高地全体の旧地形はわかりづらくなっているが、石器類の採集地点は住宅地の中の島状に残された部分で、神社(下森神社)の祀られている所を中心におよそ1,000m²の範囲である。なお、今回の採取地の周辺には宅地・道路開発が予定されており、今のうちに石器の出土範囲を把握しておく必要性を痛感する。今後の遺跡調査の参考になればと考える。

2. 位置と環境

京都府北東部に位置する舞鶴市は、若狭湾が最も入り込んだ舞鶴湾を東西から囲むように市域を形成している。舞鶴湾は東西に深く入り込み、その背後には流れ込む河川によってそれぞれ沖積平野が形成され、西舞鶴湾背後の平野部の東側を伊佐津川が、西側を高野川が各々北流



第1図 女布遺跡位置図(1/50,000:右下の図)

する。高野川はその中・上流域で東西方向の谷平野を形成しており、一帯は高野地域と呼ばれる。遺跡はこの高野地域の入り口にあたる中流域の右岸、すなわち南側に位置する女布集落東側の丘陵北端裾に形成された微高地上に立地する。遺跡の範囲は微高地上とその周辺部南北約150m・東西約250mである。現在、微高地上は畑として利用され、ほぼ中央には下森神社が祀られているほか、周辺部の水田は造成され住宅地となっている。標高は神社周辺で10mである。

女布遺跡の存在は、微高地上の畑を耕作中にたくさんの土器片や石器などの遺物が出土することから知られるようになったもので、地元の話では、以前は杉林であったものを開墾して畑にしたのだという。これまでの採集遺物には、弥生時代の各種弥生土器、磨製石斧や石鏃などの石器、古墳時代の土師器や須恵器、滑石製の大型子持勾玉、奈良時代から平安時代にかけての土師器、須恵器、緑釉陶器などがあり、^(注2) おおむね弥生時代中期から平安時代後期までの年代幅がある。

平成3年、遺跡の微高地西側の水田部で計画された宅地造成工事に先立ち舞鶴市教育委員会が行った範囲確認のための試掘調査で、水田耕作土直下において部分的に遺存する遺物包含層を確認し、女布遺跡で初の発掘調査を実施した。この調査では、弥生時代中期末の土坑1基、古墳時代中期の方形竪穴式住居跡5基、古墳時代後期末から奈良時代にかけての掘立柱建物跡数棟分を検出し、遺跡の内容が一部ではあるが初めて明らかになった。^(注3)

また、平成9年には微高地東側でも宅地造成工事が計画されたことから試掘調査と一部発掘調査を行い、微高地の周囲で遺物包含層と古墳時代後期の水路状遺構を検出した。水路状遺構からは木製鋤や木樋など水田耕作に関係するとみられる木製品が出土した。

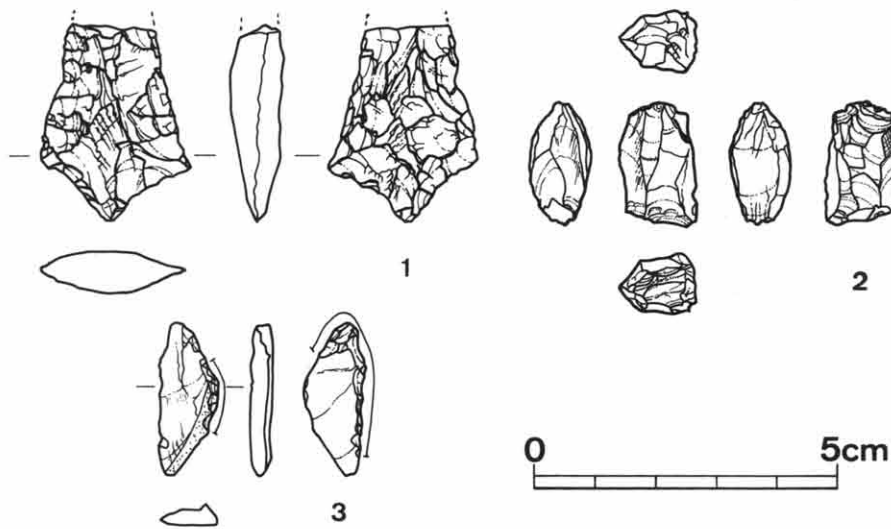
その後、平成11年には、微高地北側でも大規模な宅地造成工事が計画されて試掘調査を行ったが、厚い粘土層の堆積がみられたのみで遺物の分布は確認できなかった。

これまでの調査結果を総合すると、女布遺跡は弥生時代中期から平安時代後期にかけての集落遺跡であり、その中心は微高地上にあって、未調査である南側をのぞく西側と東側の周辺部に広がること、微高地上の畑から採集された遺物は遺物コンテナに5箱以上あり、中には大きな土器片があることからみて、先の開墾による掘削とその後の耕作の鋤先が遺跡本体にまで及んでいる可能性が高いこと。等が挙げられる。

3. 資料

それでは特徴的な3点のサヌカイト製石器を具体的にみていきたい(第2図および写真)。

1は有舌尖頭器である。下半部から基部にかけてのもので先端部を折損している。残存する長さ3.2cm・最大幅2.5cm・最大厚さ0.9cm、重さ6.5gである。形態は近畿・中国・四国地方にまで広く分布する長野県柳又遺跡を指標とする柳又(やなぎまた)型といわれるタイプである。^(注4) 両側縁部が基部に向かって開き、ゆるやかに内湾して短く尖った茎を形成している。加工はもとの主要剝離面や原礫面をほとんど残さずていねいな剝離が加えられている。京都府下ではおよそ40例ほどの有舌尖頭器が知られているが、柳又型はその多くの割合を占めている。時代的には、旧石器時代末期とされる北海道の有舌尖頭器を除き、本州以南のものは縄文時代草創期に位置付けられ



第2図 採集石器実測図

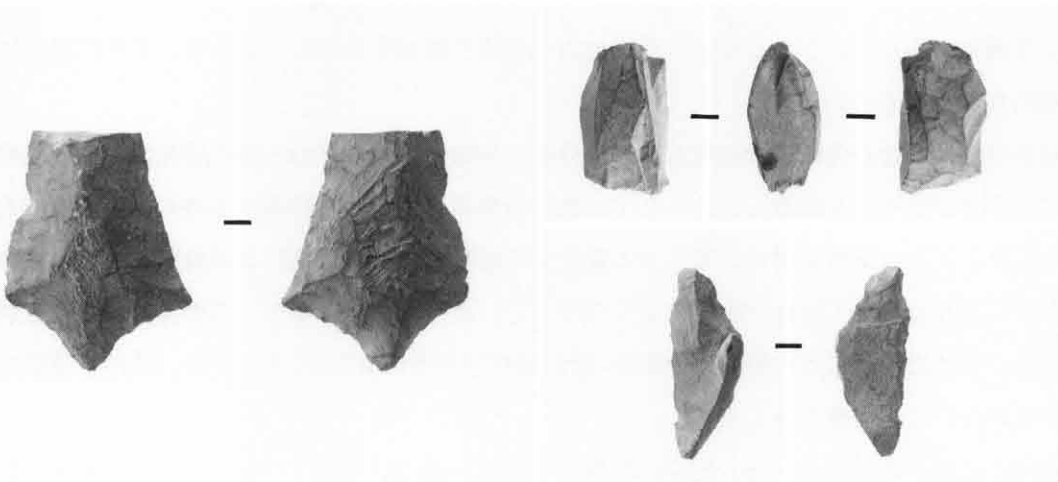


写真 採集石器

ている。およそ12000年前のものといえる。また多くの遺跡で隆起線文土器や爪形文土器などの土器と共伴する事実が確認されている。

2は楔形石器(ピエス・エスキーユ)である。旧石器時代には出現し、縄文時代以降に盛行する石器である。多くは四辺形の表面形と紡錘形の断面形をもち、上下両端からの打撃によって細かな階段状の剝離を持つ特徴的な石器である。本例も以上のような表・断面形を呈し、右側面に分割面が、そして尖りぎみの両端に細かな剝離および潰れ痕などが形成されており、楔形石器の特徴を満たしている。なおここで注意しておきたいのは、正面側(図左から二つ目)に上からの槌状剝離を観察できる点である。一見、板状素材の細石核と見紛うものであるが、平坦な打面をもたないこと、表裏面における他の剝離面の剝離が一方向に抜けておらず、上下端からの力が中間部で緩衝しあっていること、さらに他に細石器関連の遺物が皆無であることなどから、本例を楔形石器と認定した。長さ2cm・幅1.3cm・厚さ1cm、重さ3.5gを測る。

3は加工痕のある剝片である。素材は、楔形石器のような板状剝片に両端からの打撃が加わって

生じた小型剥片である。上端部と右側縁に細かな二次加工の剥離がある。長さ2.5cm・幅1cm・厚さ0.4cm、重さ2gを測る。

4. おわりに

これまで女布遺跡は、弥生時代中期から中世の遺跡と考えられていた。それが今回の石器、特に有舌尖頭器の発見によって少なくとも縄文時代草創期(約12,000年前)にさかのぼる遺跡であることが明らかとなった。舞鶴市では同時代の遺跡としては小橋遺跡出土の有舌尖頭器^(注5)が知られており、今回で二例目となった。今回の女布遺跡で重要な点は、およそ1,000m²の範囲に石器群がまとまって分布していることである。短期間ながらこの地点で石器を使用してのさまざまな活動を行った可能性が指摘される。女布遺跡はもともと広い微高地上に展開する遺跡で、縄文時代草創期の遺跡立地としては申し分ない環境であると言える。しかし惜しまれるのは先にも述べたように、ただでさえ浅い土壌の堆積状況のところ、後世の畑地開墾などで元来の石器包含層は壊滅的な状況になっていることである。将来的にも本地点では発掘調査による層位的な遺物の取り上げは困難であろう。しかしながら採集地周辺を広く調査することによって、さらに貴重な資料が得られると考えている。

有舌尖頭器を含む尖頭器の研究も、形態分類・分布・年代などの基礎的研究はかなり成熟してきて、今日ではそれを装着した槍としての機能の解明、すなわち投槍か手持ちの突き槍であるのかということや、気候変動にともなって変化する動物相に適した槍による狩猟方法を、遺跡立地などから追及していく研究が盛んになりつつある^(注6)。そうした意味から、この女布遺跡でも背後の丘陵地を含めた地点ごとの細やかな踏査(地形観察や表面採集など)をすすめ、遺跡全体像の復原をすすめていく必要性を感じる。

最後に石器群の発見者であり紹介の契機を与えていただいた森下一夫氏、石器を実見し詳しくご教示いただいた鈴木忠司氏(京都文化博物館)、小滝篤夫氏(福知山高等学校)、さらに丹後地方の石器出土遺跡の所在について御教示いただいた長谷川達氏(丹後郷土資料館)に感謝の意を表したい。なお写真撮影は、当調査研究センター主任調査員田中 彰による。

(よしおか・ひろゆき＝舞鶴市教育委員会社会教育課)

(くろつば・かずき＝調査第2課調査第1係主査調査員)

- 注1 坂根清之「女布遺跡について」(『舞鶴市史編さんだより』17 舞鶴市史編さん室) 1973
安藤信策「丹後の祭祀遺跡」(『丹後郷土資料館報』6 京都府立丹後郷土資料館) 1985
京都府丹後郷土資料館「祈りの遺跡-丹後の古代信仰-」(特別陳列図録17) 1985
- 注2 女布遺跡の遺物採集は昭和40年代に村尾正人氏を中心に行われた。最近では女布地区の森下一夫氏が精力的に採集されている。これらの採集遺物はすべて舞鶴市教育委員会が保管している。
- 注3 舞鶴市教育委員会「女布遺跡発掘調査現地説明会資料」 1991
- 注4 白石浩之「有舌尖頭器の出現」(『旧石器時代の石槍』p86~89、東京大学出版会) 1989
- 注5 片岡 肇「舞鶴市小橋川川床発見の有舌尖頭器」(『古代文化』第24巻9号(財)古代学協会) 1972
- 注6 鈴木忠司「岩宿時代の槍と陥穴」(『考古学ジャーナル』No.468 p5~8) 2001

設立20周年記念事業をおえて

竹井治雄

1. はじめに

当調査研究センターは、本年(平成12年度)に設立20周年を迎え、その記念事業として特別展覧会「京都・時を旅して」、特別講演会「京都・古代の輝き」を開催した。

当調査研究センターでは、昭和56年の設立以来、京都府内の発掘調査を数多く行っており、大きな成果をあげてきた。なかでも水晶製玉類を製作していた奈具岡遺跡、平城京へ瓦を供給した上人ヶ平遺跡など全国的に注目された遺跡も少なくない。また、本年度は、峰山町赤坂今井墳丘墓でガラス製勾玉などから成る豪華な頭飾りが出土するという大きな成果があった。これらの成果については、例年「小さな展覧会」において多くの方々に見ていただいております。その会期中に「埋蔵文化財セミナー」を開催している。今回の記念事業は、この20年間の調査成果を一堂に集めた特別展覧会と特設展示である玉類に注目した特別講演会を開催し、広く府民に公開することで埋蔵文化財に対する理解を深めることを目的とした。

この事業の開催に当たり、京都府教育委員会(特別講演会)、京都府立山城郷土資料館・京都府立丹後郷土資料館(特別展覧会)の共催を得て、向日市文化資料館(特別展覧会)の協賛を賜った。また、遺物展示などで関係教育委員会にも大変お世話になった。記してお礼を申し上げます。

2. 事業内容

(1) 設立20周年記念特別展覧会

テーマ：『京都・時を旅して』

開催期間：平成12年10月1日(日)～10月29日(日) 開館は23日間

場所：向日市文化資料館1階エントランスホール・2階研修室

図録：『京都府埋蔵文化財調査研究センター設立20周年記念特別展覧会 京都・時を旅して』

A4判25ページ

展示では、大きく2つのコーナーを構成した。1つは、メインテーマ「京都・時を旅して」に沿い、当調査研究センター設立以来、20年間にわたって行った調査で出土した主な遺物およびこれに関連した遺跡の写真パネルを展示したコーナー(2階研修室)であり、もう1つは、「京都・古代の輝き」と題し、やはり当調査研究センターのこれまでの調査で出土した遺物のなかでも、特に装飾品と玉作り関係遺物並びにこれに関連した遺跡の写真パネルを展示したコーナー(1階エントランスホール)である。前者は、今回の設立20周年記念の趣旨に沿って、当調査研究センターの過去の調査成果を振り返ることを目的としたコーナーであり、後者は、20年間の調査成果

の中でも、最も注目を浴びた出土品、装飾品・玉作りというテーマを選んで設けた特設コーナーである。なお、特設コーナー内には、当調査研究センターが行った調査以外にも、近年、話題を集めた資料として大風呂南墳墓(岩滝町)・天竺堂古墳(山城町)・左坂墳墓群(大宮町)から出土した装身具類も、関係機関から借用させていただき展示した。

展示設営に当たっては、1階フロア中央部に、土器を自由に触れる小コーナーを設置した。2階研修室入り口(廊下)にはビデオを置き、主要な遺跡の遺構・遺物を解説した。アンケート用紙を入れる箱も設置した。会場には、職員が常時巡回し、説明係も兼ねた。

2階研修室での展示は、メインテーマ「京都・時を旅して」に沿い、10の小テーマに分けて、この20年間の成果を展示した。入り口には、展示遺跡の位置を地図で場所が分かるようにした。

「石器の世界」は、小さなスペースであったが、長岡京市の舞塚遺跡のナイフ形石器など3万年前に遡る旧石器や縄文時代の石器を並べた。

「土器からみた時代の流れ」では、縄文時代から7世紀までの土器の変化を舞鶴市志高遺跡、丹後町平遺跡、長岡京市雲宮遺跡、八幡市備前遺跡等の資料で示した。

「いのりとまつり」は、福知山市興・観音寺遺跡の分銅形土製品、網野町浅後谷南遺跡から出土した木製品、木津町釜ヶ谷遺跡の土馬・ミニチュア竈・墨書人面土器等の各時代の祭祀に関する遺物を集成したコーナーである。

「王墓の誕生」は、特設コーナーとも関連するが、今回の代表的な展示である。大山崎町下植野南遺跡に典型的に見られる方形周溝墓は、弥生時代を通じて営まれた家族墓と考えられている。弥生時代後期には峰山町赤坂今井墳丘墓に代表される巨大なマウンドをもつ墳丘墓が出現した。この時代の丹後は全国的に注目を浴びており、いきおい力の入った展示コーナーとなった。なお、一階に赤坂今井墳丘墓第4主体部の木棺内の赤色顔料や玉類(頭飾り)出土の写真パネルを会期中に速報展示した。

「大王の時代」では、綾部市私市円山古墳の鉄製品を中心に甲冑、鉄剣、鉄刀、鉄鏃等の武器、武具と木津町瓦谷古墳群、弓田遺跡等の円筒埴輪、形象埴輪等を展示した。

「みやこの風景」として、長岡京や平安京で出土した緑釉を施した皿、椀、高杯、香炉等の陶器、奈良三彩等を展示した。これらは生活用品であっても、目を見張るようなものが多い。また、硯、木簡、木印、銅印等は中央政治を司る役所の様子が浮き彫りになった。

「地方の役所」の例として、丹波国府跡と考えられる千代川遺跡等の出土遺物を展示した。

「ものをつくる」は、当調査研究センターの20年間で最も成果のあがった生産遺跡のコーナーで、相当の展示スペースを取った。舞鶴市浦入遺跡(製塩)、木津町奈良山瓦窯跡群(瓦生産)、弥栄町遠所遺跡(製鉄)、亀岡市篠窯跡群(須恵器生産)等を紹介した。「玉作り」は階下のコーナーに展示した。それぞれの遺跡は人が道具と土と火を用いる共通点があり、ダイナミックな展示になっている。

「中世の暮らし」では、平安京の土器や椋ノ木遺跡の出土遺物を展示して、中世土器の一端を紹介した。土器では奈良・平安時代以来の土師器が主流であるが、急速に普及した瓦器皿・椀や

須恵器に代わる陶器を展示した。また、青白磁の香炉等は輸入品として貴重品であったものである。

「近世の京都」として、桃山時代に焦点をあて、聚楽第およびその城下出土の金箔瓦と、織部、志野等の桃山の茶陶や華南三彩盤等の輸入陶磁器とをあわせて展示した。

特設コーナーの「京都・古代の輝き」は玉類等の装飾品と鏡類を中心に展示した。

受付から入ってすぐのところに舞鶴市志高遺跡、大江町三河宮ノ下遺跡の縄文時代の耳飾り・石製装飾品を展示した。弥生時代では弥栄町奈具岡遺跡の碧玉、緑色凝灰岩を材料にした玉類、水晶製玉類の製作工程、久御山町市田齊当坊遺跡の碧玉製の玉作り製作工程や関係遺物を詳しく展示した。丹波町塩谷5号墳の巫女形埴輪は、その髪型、服装、装身具等から古墳時代の女性のファッションの一端をうかがわせるものである。

奥壁には大きな展示ケースを2台並べ右側には大宮町左坂墳墓群、丹後町高山3・12号墳の勾玉・管玉・小玉等の玉類を並べた。左側は福知山市ヌクモ2号墳、木津町瓦谷1号墳、弥栄町愛宕神社古墳等から出土した竜虎鏡、獣首形鏡、四獣形鏡等の古鏡(銅鏡)を十数点置いた。また、この前の小ケースには浅後谷南遺跡等から出土した八稜鏡(和鏡)を展示した。左壁奥には網野町横枕遺跡、城陽市芝山遺跡他から出土の帯(バンド)を飾る石帯、銅製帯金具を展示した。

岩滝町大風呂南1号墓の展示では、ガラス製釧(レプリカ)を中心に銅釧を配し、写真パネルとあわせることにより臨場感を増すようにした。階段下のケースには山城町天竺堂古墳から出土した勾玉・管玉・ガラス小玉等、夥しい数の深い緑色の玉類を展示した。

(2) 設立20周年記念特別講演会

テーマ：『京都・古代の輝き』

日時：平成12年10月14日(土)13:00～16:00

場所：向日市民会館ホール 聴講者数は300名

内容：開会挨拶 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長 樋口隆康

講演 『平安京のあけぼの』 京都大学名誉教授(古代史) 上田正昭氏

『古代の玉・霊の輝き』 奈良大学教授(考古学) 水野正好氏

資料：『京都・古代の輝き 京都府埋蔵文化財調査研究センター設立20周年記念特別講演会』

A4判23ページ

上田先生は文献を駆使して、平安京のはじまりは秦氏など渡来系氏族の活躍があることを指摘され、東アジアの歴史の中で「京都」を考えなければならないことを力説された。水野先生は発掘資料をもとに、「玉」が古代人にとっていかに重要であったかを力説された。また、赤坂今井墳丘墓の頭飾りについても、勾玉と他の玉類との組み合わせに言及され、私達に具体的なイメージを与えてくださった。

3. 特別展覧会を終えて

特別展覧会・講演会に際し記帳、アンケートをお願いし総数527枚の回答をいただいた。展覧会の入場者数の1/4にあたる。その結果、展覧会について多くの感想・意見、総合的な印象等が

得られた。

展覧会の入場総数は2,031名、男女別比率は6.5:3.5である。数組の「団体」入場者もあったが、一日の平均は88人で例年の「小さな展覧会」とほぼ同様である。年代別では60代が19%と最も多く、続いて50代の17%である。一方、30代の8%が最も少ない。全体傾向としてはやはり50代以上が目立つ。小学生については12%と多くの参加があったのは、喜ばしいことである。入場者の地域別は京都府内が全体の3/4、他府県は1/4である。府内では乙訓地域と京都市を合わせると8割に達するが、京都北部や南部地域も多く、関心の高さが窺われた。一方、他府県では大阪府が圧倒的に多いが、東日本から120名もあったことは特筆される。

アンケートの内容は①展覧会をどのように知ったか?、②展示はどうでしたか?、③説明板はどうでしたか?、④「ご意見・ご感想」の4項目である。有効回答数は524である。

①は「ポスター・チラシ」、「新聞・ラジオ」、「ハガキ・開催要項」等は各100ポイント前後であるが、「資料館・図書館にきて」が140ポイントと目立って多く、入場者数に換算すると実に550人と全体の1/4に達する。展覧会の「PR、宣伝活動が足りない」との指摘もあったことを考慮すると、あらためて向日市文化資料館、図書館に感謝しなければならない。

②は「よかった」が400、「ふつう」が110ポイントである。「展示品の量が多くよかった」、「装飾品の特設コーナーがよかった」の感想が多かった。逆に、「展示内容が物足りない」との意見があったが、「説明してもらえて大変よかった」が20数ポイントもあり思いのほか多かった。

③は「よかった」が350、「ふつう」が150、「むずかしかった」が20ポイントである。説明板については「ふつう」のポイントが②よりも多く、「展示品の年代や内容が分かりにくい」ので「もっと説明して欲しかった」の意見・感想が多かった。

入場者の多様な要望の全てに答えることができないもどかしさは、毎回、展覧会の終了時に思うことであるが、展示方法や宣伝活動が本当に難しいものであることを痛感する次第である。

「特別展覧会」は、当調査研究センター20年間の発掘調査の集大成である。その披露に際し、可能な限り多くの貴重な資料を陳列することにより、一万年以上に及ぶ「京都・時を旅して」を追体験し、「京都・古代の輝き」を体感して戴くことを望んだ。会場では、できる限り入場者に説明・案内を行い、埋蔵文化財の普及・啓発を努めることとした。1か月間の会期中には、多くの方々から「毎年、開催して欲しい」、「ありがとう」の言葉を戴き、盛況の内に無事終えることができた。

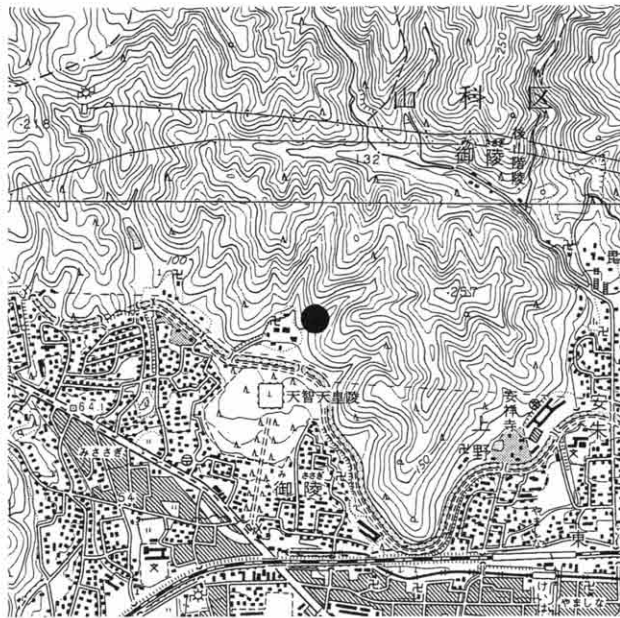
(たけい・はるお=調査第1課企画係主査調査員)

府内遺跡紹介

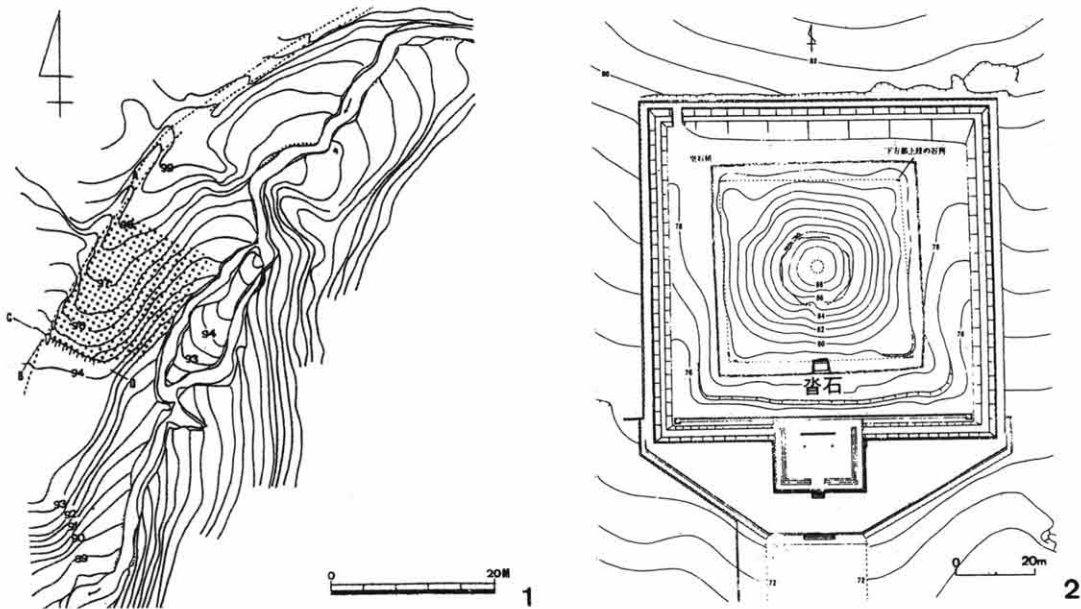
90. ^{おおいわやま}大岩山^{みささぎおおいわちよう}たたら跡(御陵大岩町遺跡)

遺跡の概要 京都府内において、製鉄遺跡の集中する地区は丹後半島であることは、言うまでもない。しかし、平安京近郊にも京都市山科区から滋賀県西南部にかけて、逢坂山製鉄遺跡群と呼ばれる製鉄遺跡が広がっている。この遺跡群は、滋賀県側では、立命館大学瀬田キャンパスの造営に先だって大規模な発掘調査が行われた大津市木瓜原遺跡や、最近の調査で長方形箱形炉であることが確認された草津市野路小野山遺跡などが著名であり、その製鉄遺跡群の東端に位置するのが大岩山たたら跡である。この遺跡は、1969年の工事中に偶然発見されたが、発掘調査が行われていないため、実態は不明な点が多い。現在、天智天皇陵の北側に隣接する本國寺の北西の谷の中には、幅約3m・長さ約20mの堤状遺構を認めることができる。さらに、その前面(谷の出口部分)にはゆるやかなテラス状地形が形成され、鉄滓が散乱している。現在は、堤とテラスを断ち切るように、谷の中央を小川が流れているが、本来は谷を堤によってせき止め、長軸約25m・短軸約16mの貯水池を構成していたものと考えられる。なお、これらの鉄滓の分析結果によると、いずれも精錬滓で磁鉄鉱を原料鉱石としたことが判明している。この点は、砂鉄精錬である丹後半島の製鉄遺跡とは異なっている。なお、詳細な時期決定はできないが、おおむね7世紀後半期に操業年代の1点を押さえることができよう。

遺跡の意義 この遺跡が重要なのは、天智天皇陵に隣接していることと、『日本書紀』天智9年条の「是歳造水碓而冶鉄」の「水碓」がこの遺跡の堤状遺構と関連づけられてきたことによる。「水碓」が何かについては、鉄鉱石の破碎するための装置あるいは鞴に送風するための装置とみる見解があるが、いずれも水車などの水力を利用した装置であると考えられてきた。「碓」とは、中国の文献資料によると槌子の原理によって杵と臼を組み合わせた道具を指し、「水臼」は後漢の初めに出現し、晋代に普及したと考えられている。中国における製鉄技術では、水排と呼ばれる鞴の送風装置が漢代に登場しており、製鉄と水力の利用とは、密接に結



第1図 遺跡の位置(1/25,000)



第2図 大岩山たたら跡(1)と天智天皇山科陵(2)(参考文献より)

びついていたらしい。そのため、堤を築いて水位を上昇させ、集中的送流を管理するための施設が、必然的に伴うことになったと思われる。

それでは、このような「水碓」がなぜ天智天皇によって造られたのか。この遺跡は、大津京の造営や、7世紀前葉から中葉に築かれて鉄滓を副葬する京都市旭山古墳群とも何らかの関連を持っていたことが想像される。しかし、天智天皇山科陵の完成後にも製鉄遺跡が操業していたとも考えにくい。陵墓域内には須恵器窯もあって、中臣鎌足の「陶原家」との関連も推測されている。天智紀によれば、天智天皇は天智10(671)年12月3日に、近江宮で崩じたという。翌年の5月には、山陵の造営のために、美濃・尾張両国司に対して、山陵造営のための人夫が徴発されたことが記されている。一方、「水碓」が造られたのは死の前年であり、これが大岩山たたら跡の堤状遺構を指しているならば、この施設の機能した時間は、きわめて短いことになる。この反面で、滋賀県側の逢坂山製鉄遺跡群では、天武朝以降にも操業が継続しており、天智陵が山科に設定されたために、「水碓」は1年余りでその役目を終えたことになる。

ところで、『帝王編年紀』には、天智天皇の死に関して、「或日、天皇駕馬、幸山科郷、更無還御、永交山林、不知崩所、以御沓落所、為其陵」とある。これは伝承であって、事実をどれだけ伝えているかは疑わしいが、この地点が、製鉄や製陶などの生産技術を統括する拠点と重なってくる点は興味深い。

遺跡の案内 天智天皇陵北側にある本國寺をめざし、小川の流れている北西の谷を徒歩10分余り遡り、堤状遺構を見つけることができる。

参考文献

中井正幸「山階製鉄考—『日本書紀』天智九年「是歳造水碓而治鉄」に関する一試考—」(『製鉄史論文集』 たたら研究会) 2000

(河野一隆)

長岡京跡調査だより・76

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成12年11月22日・12月20日・平成13年1月24日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内5件、左京域8件、右京域8件であった。京域外の4件を併せると、合計24件となる。

調査地一覧表(2001年1月現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第398次	7ANCMK-4	向日市向日町北山18-30	(財)向日市埋文	11/2~11/9
2	宮内第399次	7ANEKT-4	向日市鶏冠井町楓畑5・6	(財)向日市埋文	11/27~
3	宮内第400次	7ANFOC-10	向日市上植野町御塔道2-17	(財)向日市埋文	11/21~
4	宮内第401次	7ANEDN-8	向日市鶏冠井町大極殿65-11	(財)向日市埋文	12/18~
5	宮内第402次	7ANFMK-16	向日市上植野町南開34-17	(財)向日市埋文	1/9~1/18
5	左京第453次	7ANFKW-6	向日市上植野町桑原14-1他	(財)向日市埋文	9/12~10/11
6	左京第455次	7ANDTK-7	向日市森本町高田1	(財)向日市埋文	9/25~11/10
7	左京第457次	7ANDTK-8	向日市寺戸町高田1	(財)向日市埋文	10/16~11/10
8	左京第458次	7ANFDE-8	向日市上植野町堂ノ前10-1	(財)向日市埋文	12/7~12/27
9	右京第689次	7ANBKJ	向日市寺戸町古城13番地	(財)向日市埋文	12/20~
10	中海道第54次	3NNANK-54	向日市物集女町中海道63	(財)向日市埋文	11/7~11/27
11	中海道第55次 (物集女城6次)	3NNANK-55 (9ZMANY-6)	向日市物集女町中条11-1	(財)向日市埋文	11/17~12/14
12	立会調査第64次	7ANFDE・FGN	向日市上植野町堂ノ前、御妙林地内	(財)向日市埋文	10/10~10/19
13	笹屋7次	7ANBMT-3	向日市寺戸町向畑19-3、19-4、19-5	(財)向日市埋文	11/21~12/7
14	右京第681次	7ANMKI-7	長岡京市東神足二丁目7	(財)長岡京市埋文	9/4~10/31
15	右京第683次	7ANIOK-6	長岡京市天神五丁目13-1・2	(財)長岡京市埋文	9/20~10/24
16	右京第684次	7ANMTT-6	長岡京市東神足二丁目1-1	(財)長岡京市埋文	10/23~12/27
17	右京第685次	7ANIAE-13	長岡京市今里四丁目216-1・217・219・228-1	(財)長岡京市埋文	12/4~12/26
18	右京第686次	7ANKTK-1	長岡京市天神二丁目101-3他	(財)長岡京市埋文	12/4~12/13
19	右京第688次	7ANKHT-6	長岡京市開田四丁目15	(財)長岡京市埋文	12/18~13.3/19
20	左京第456次	7ANQSH-1	長岡京市勝竜寺尻細2-1	(財)長岡京市埋文	11/1~11/13
21	右京第687次	7ANSTE-19	大山崎町円明寺小字鳥居前5-1	大山崎町教育委員会	11/29~12/5
22	左京第454次	7ANVMK-5	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文研	10/11~13.1/末
23	左京第450次	7ANXOO-2	京都市伏見区羽東師菱川町	(財)京都市埋文研	6/26~

24	下植野南遺跡		大山崎下植野門田地内	(財)京都府埋文	4/11～13.2/末
25	百々遺跡	IK38次	大山崎町字円明寺小字夏目	(財)京都府埋文	8/21～12/20

長岡京跡発掘調査抄報

宮内 第398・399次調査地は、朝堂院西方官衙にあたるが、長岡京期と思われる地業跡 S X 39917(河床礫使用の石組み遺構)が確認された。第400次調査地は朝堂院南方官衙に推定されており、南北礎石建物(梁間10尺、桁行13尺)の礎石抜き取り穴を3基検出した。第401・402次調査地は長岡京期の遺構はないが、整地土 S X 40203が確認され「空闲地」として利用されていた。調査地は狭小であるが、長岡京の造営に伴う地業跡・整地土等を確認できた成果は重要である。

左京城 第453次調査地は中福地遺跡推定地内にあり、幅0.7～1.4m、深さ0.5mを測る断面「U」字形の溝(S D 45310・17)が検出され、八稜鏡のほか平安時代後期の土師器・須恵器・瓦器・白磁碗等が出土した。第454次調査地は一条三坊七・八・十町にあたり、長岡京期の流路跡(西羽東師川旧河川)を検出した。下層では奈良時代の斎串、最下層(弥生時代?)では多数の流木に混じって木製品2点が出土した。第455次調査地は東二坊西側側溝 S D 45515、柵 S A 45546を長さ30m以上にわたって検出した。柵の柱間寸法は3～3.5mとさまざまであるが、門など出入口に関わる施設は検出されなかった。

右京城 第681次調査では、中世勝竜寺城の下層から築城前の溝、鎌倉時代後期の井戸・柱穴・土坑のほか弥生式土器を伴う方形周溝墓の溝を検出した。第683次調査では、弥生時代の3～4mを測る不定形な土坑3基を検出した。土坑内の堆積土は砂層であり、その性格については不明である。第684次調査で検出された土器埋納土坑 S K 04は長方形(長さ0.6～0.9m)を呈し、出土遺物に黒色土器b類碗・土師器皿・須恵器鉢があり、10世紀末～11世紀初頭のものである。溝 S D 02は南北に細長い溝で、平安時代の緑釉陶器小片が出土した。掘立柱建物跡 S B 03・06は長岡京期の遺構である。掘立柱建物跡 S B 03は梁間2間(7尺等間)、桁行4間(7尺等間)、南側に庇(8尺)を持つ東西棟である。東側の棟持ち柱抜き取り跡には須恵器壺Aと蓋のセットが埋納されており、この建物廃絶期の祭祀に伴うものと見られる。土坑 S K 14は一辺4m以上の方形を呈し、多量の土器、瓦に混じり、鍍金された鉏をもつ鉄製刀子があった。下層では弥生時代の方形周溝墓が検出された。第685次調査で検出された掘立柱建物跡 S B 10(長岡京期?)は大型の建物であるが、南北棟か東西棟かは不明である。第688次調査では六条条間南小路の北側溝、六条二坊五町内の南北町内溝・井戸・土坑柱穴等を検出した。出土遺物は各種土器類のほか、製塩土器・瓦・土馬・神功開寶・銅製鈴など、多種多様である。第689次調査では五塚原古墳南西側の開析谷の地形測量を行い、古墳との関連遺構を調査する。

京域外 中海道第54・55次調査で検出された溝 S D 5202はその規模、形態が物集女城跡の溝と酷似するものの、位置・埋没状況等から関連性はないようで、飛鳥時代に溯る集落の可能性があると考えられた。南側の土塁の規模築造方法と時期等が確認でき、その結果、東土塁にはほぼ匹敵するとともに物集女城の主廓部が確定した。下植野南遺跡の中を横切る久我畷は砂礫、粘質土による盛土で造られ、その両側溝は中世に属するものと見られる。

(竹井治雄)

センターの動向(00.11～01.1)

1. できごと
- 11.1 池上遺跡・池上古里遺跡(八木町)発掘調査開始
- 7 池上遺跡第7次(八木町)関係者説明会
- 8 埋蔵文化財調査支援機器の開発に関する研究会(於：京都市)平良泰久調査第2課長出席
池上遺跡第7次発掘調査終了(6.21～)
- 11～12 京都府埋蔵文化財研究会(於：城陽市)
- 13 上津屋遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 14 教育庁職員行政・人権問題研修(第1回)開催(於：京都府庁)伊野近富企画係長、田中 彰、森下 衛主任調査員、杉江昌乃主任、岡崎研一主査調査員、今村正寿主事、森島康雄、村田和弘、藤井 整調査員出席
- 15 桑原口遺跡(宮津市)発掘調査開始
- 16 東山遺跡発掘調査終了(6.1～)
- 17 職員研修(於：当センター)講師：太田信之京都府教育庁同和教育室長「同和問題の今日的な課題」
- 20 教育庁職員行政・人権問題研修(第2回)開催(於：京都府庁)竹原一彦、増田孝彦主任調査員、竹井治雄主査調査員、鍋田幸世、岡田正記主事、野島 永、河野一隆、中島史子調査員出席
- 21～28 全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修「中国」村田和弘調査員参加
- 24 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：大津市)杉江昌乃主任、今村正寿主事出席
人権研修会(於：京都市)福嶋利範事務局次長、平良泰久調査第2課長出席
- 26 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 28 教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ開催(於：ルビノ京都堀川・府庁西別館)福嶋利範事務局次長、小山雅人調査第1課長、久保哲正調査第2課主幹、水谷壽克調査第2課課長補佐、辻本和美調査第3係長出席
- 12.5～15 奈良国立文化財研究所専門研修「寺院遺跡調査課程」石尾政信主査調査員参加
- 8 木津川河床遺跡第13次(八幡市)発掘調査終了(10.13～)
- 14 石野博信徳島文理大学教授、佐山遺跡現地指導
- 18 椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査開始
- 19 第60回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、川上 貢、都出比呂志、井上満郎、高橋誠一、三品廣実、中谷雅治理事出席
当センター設立20周年を祝う会(於：ルビノ京都堀川)

- 20 長岡京連絡協議会(於：当センター)
内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 21 佐山遺跡(久御山町)現地説明会
- 22 桑原口遺跡(宮津市)発掘調査終了
(11.15～)
- 27 百々遺跡(大山崎町)発掘調査終了
(8.21～)
- 1.12 木津川河床遺跡第12次(八幡市)発掘
調査終了(9.7～)
- 18 井上満郎理事、女谷横穴群(八幡市)
現地視察
- 23 藤井 学理事、佐山遺跡(久御山町)
現地視察
- 24 太田遺跡(亀岡市)現地説明会
長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 26 人権問題特別研修(於：京都府職員
研修所)奥村清一郎課長補佐出席
太田遺跡、発掘調査終了(5.25～)
- 30 中澤圭二副理事長、木津城山遺跡
(木津町)現地視察



佐山遺跡現地説明会(平成12年12月21日)

受贈図書一覧(00.11~01.1)

(財)いわき市教育文化事業団

いわき市埋蔵文化財調査報告第67冊 常磐自動車道遺跡調査報告15

北上市立埋蔵文化財センター

北上市埋蔵文化財調査報告第9集 南部工業団地内遺跡Ⅰ、同第13集 藤沢遺跡Ⅲ、同第26集 浮牛城跡Ⅱ、同第27集 南部工業団地内遺跡、同第37集 藤沢遺跡Ⅴ、同第38集 横町遺跡、同第40集 滝ノ沢遺跡Ⅴ、同第42集 大堤遺跡、同第43集 江釣子古墳群・五条丸支群、紀要第1号、北上市埋蔵文化財年報1996年度、同1997年度、同1998年度

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

年報19、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第241集 白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡、同第244集 田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡、同第261集 三ツ木皿沼遺跡、同第369集 白井北中道遺跡

(財)香取郡市文化財センター

(財)香取郡市文化財センター調査報告書第35集 織幡ササノ倉遺跡、同第36集 仲台遺跡、同第56集 仲台遺跡、同第65集 地々免遺跡、同第67集 堀込Ⅱ遺跡、同第68集 多古台遺跡群Ⅰ遺跡、同第69集 向井内遺跡、同第70集 中内原遺跡・北の内遺跡、同第71集 青山甚太山遺跡、事業報告Ⅸ

(財)市原市文化財センター

年報平成8年度、同平成9年度、(財)市原市文化財センター調査報告書第12集 能満上細工多遺跡・能満上新関遺跡・能満番面台遺跡・能満旧三山塚、同第68集 市原市北野原遺跡、同第69集 市原市小島向遺跡、同第70集 市原市片又木遺跡Ⅱ、同第72集 市原市姉崎東原遺跡C地点(2)、同第73集 市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡(第2次)

(財)東総文化財センター

(財)東総文化財センター発掘調査報告書第20集 夏台遺跡、同第21集 篠本城跡・城山遺跡、年報5

(財)印旛郡市文化財センター

(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第141集 成田ビューカントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書(3)、同第157集 中沢野馬木戸遺跡、同第159集 吉見台遺跡A地点、同第162集 萩原長原遺跡・貉谷塚群、同第164集 折立遺跡、同第167集 吉見城跡、年報15、同16

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第88集 多摩ニュータウン遺跡、同第90集 代継・富士見台・西龍ヶ崎遺跡、同第92集 多摩ニュータウン遺跡No.520遺跡、年報20

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 東山遺跡、同第100集 釈迦堂遺跡

富山市埋蔵文化財センター

向野池遺跡、中老田C遺跡発掘調査報告書、四方北窪遺跡、御坊山遺跡

(財)岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書第64集 戸入村平遺跡Ⅱ・小谷戸遺跡、同第65集 砂行遺跡、同第66集 野笹遺跡

(財)岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所

岐阜市文化財報告2000-1 城之内遺跡、(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第4集 平成10・11年度岐阜市内遺跡発掘調査報告書、同第5集 千疊敷Ⅲ、同第6集 下西郷一本松遺跡、岐阜城千疊敷遺跡井戸復元整備報告書

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

列島に華開く大窯製品

三重県埋蔵文化財センター

三重県埋蔵文化財調査報告184 高茶屋大垣内遺跡(第3・4次)発掘調査報告、同200-2 石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告、同213 古轡通りB遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告、宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ、平成11年度三重県埋蔵文化財年報

(財)滋賀県文化財保護協会

近江発掘創世紀

(財)大阪府文化財調査研究センター

- (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告第34集 観音寺遺跡、同第48集 池島・福万寺遺跡1、同第49集 溝咋遺跡(その1・2)、難波宮跡北西の調査、大阪2001
- (財)大阪市文化財協会
研究紀要第3号
- (財)八尾市文化財調査研究会
(財)八尾市文化財調査研究会報告64~66、平成11年度事業報告
- (財)東大阪市文化財協会
鬼虎川遺跡第25次発掘調査報告、西ノ辻遺跡第17次発掘調査報告書、貝花遺跡第3次発掘調査報告書、東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1998年度、瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査概要報告書、宮ノ下遺跡第3次発掘調査報告書、若江遺跡第65次発掘調査報告、西堤遺跡第5次発掘調査報告書、西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告書、西ノ辻遺跡第5次発掘調査概要報告書、神並遺跡発掘調査報告集、岩滝山遺跡第6次発掘調査報告書、鬼虎川遺跡第42次発掘調査報告書、鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡、水走遺跡第4次発掘調査報告、馬場川遺跡発掘調査報告書(CD-ROM)
- 高槻市立埋蔵文化財調査センター
「高槻城を語る」資料集
- (財)広島県埋蔵文化財調査センター
年報16
- (財)広島市文化財団
(財)広島市文化財団発掘調査報告書第4集 大町七九谷遺跡群、同第5集 長尾遺跡、弥生ムラ誕生、平成11年度事業記録集
- (財)徳島県埋蔵文化財センター
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第12集 四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告12、同第13集 四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告13、同第19集 土佐泊大谷遺跡、同第23集 石井城ノ内遺跡・石井・神山線地区、同第25集 マチ遺跡、同第32集 金泉寺遺跡・川端遺跡
- (財)香川県埋蔵文化財調査センター
鴨部・川田遺跡Ⅱ、雄山古墳群
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
埋蔵文化財発掘調査報告書第85集 南高井遺跡・森松遺跡、紀要愛媛創刊号、愛比壳平成11(1999)年度年報
- 小郡市埋蔵文化財調査センター
小郡市文化財調査報告書第131集 三沢古賀遺跡2、同第141集 西島下庄原遺跡・三沢蓮輪遺跡、同第142集 上岩田遺跡調査概報、同第143集 横隅上内畑遺跡2、同第144集 寺福童遺跡、同第145集 津古片曾葉遺跡2区
- 青森県教育委員会
青森県埋蔵文化財調査報告書第284集 青森県遺跡詳細分布調査報告書XⅡ、同第285集 山ノ越遺跡、同第286集 十三湊遺跡V
- 盛岡市教育委員会
志波城跡平成8・9・10年度発掘調査概報、盛岡城跡平成10年度本丸南西部発掘調査概報、安倍館遺跡
- 鶴岡市教育委員会
鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第10集 市内遺跡分布調査報告書
- 佐野市教育委員会
佐野市埋蔵文化財調査報告書第18集 佐野城跡(春日岡城)、同第19集 四ツ道北遺跡Ⅰ・下林遺跡Ⅰ
- 志木市教育委員会
志木市遺跡調査会調査報告第6集 西原大塚遺跡第45地点
- 千葉市教育委員会
埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成11年度、山王遺跡
- 北区教育委員会
北区埋蔵文化財調査報告書第27集 御殿前遺跡Ⅵ、同第28集 中里峽上遺跡Ⅱ・田端西台通遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅱ、中里貝塚2
- 府中市埋蔵文化財整理事務所
府中市埋蔵文化財調査報告第27集 朝日町遺跡調査報告1、同第28集 武蔵国府関連遺跡調査報告27・武蔵国分寺調査報告4
- 神奈川県教育委員会
神奈川県埋蔵文化財調査報告書43
- 川崎市教育委員会
川崎市文化財調査記録 第33~35集
- 岡谷市教育委員会
榎垣外遺跡発掘調査報告書、郷土の文化財21 榎垣外遺跡
- 佐久市教育委員会
佐久市埋蔵文化財年報平成10年度、佐久市埋蔵文化財調査報告書第75集 八風山遺跡

- 群、同第77集 番屋前遺跡Ⅲ、同第78集 蛇塚遺跡・蛇塚古墳、同第79集 四ツ塚遺跡Ⅰ、同第80集 四ツ塚遺跡Ⅱ、同第81集 薬師寺遺跡、同第82集 市内遺跡発掘調査報告書1998、同第83集 下聖端遺跡Ⅳ
- 新発田市教育委員会**
新発田市埋蔵文化財調査報告第19 市道関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ、同第21 寺内館跡発掘調査報告書
- 大山町教育委員会**
大山町埋蔵文化財調査報告 8 花切西遺跡発掘調査概要、同 9 花切遺跡発掘調査概要
- 舟橋村教育委員会**
舟橋村埋蔵文化財調査報告書 3 浦田遺跡発掘調査報告書、同 5 塚越Ⅰ遺跡発掘調査報告書
- 大垣市教育委員会**
大垣市文化財調査報告書第35集 昼飯大塚古墳Ⅴ、同第37集 昼飯大塚古墳Ⅵ
- 菊川町教育委員会**
横地城跡総合調査報告書
- 草津市教育委員会**
草津市文化財調査報告書第39巻 平成10年度草津市文化財年報
- 大阪市教育委員会**
大阪の歴史と文化財第6号、平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
- 貝塚市教育委員会**
貝塚市埋蔵文化財調査報告第43集 貝塚寺内町遺跡発掘調査概要、同第44集 東遺跡Ⅱ・新井ノ池遺跡発掘調査概要、同第45集 海塚遺跡発掘調査概要
- 能勢町教育委員会**
能勢町文化財調査報告書第15冊 平成11年度能勢町埋蔵文化財調査概要、同第16冊 大里遺跡発掘調査報告書Ⅳ
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所**
兵庫県文化財調査報告書第149冊 吉田南遺跡(足田地区)・北王子遺跡、同第194冊 三田城跡発掘調査報告書、同第196冊 明石城跡Ⅲ、同第198冊 北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅵ、同第201冊 外野波豆遺跡・外野柳遺跡発掘調査報告書、同第202冊 表山遺跡・池ノ内群集積
- 中町教育委員会**
宮ヶ谷遺跡・長坂谷遺跡・円満寺東の谷遺跡・西安田遺跡
- 加東郡教育委員会**
加東郡埋蔵文化財報告24 北野・黒深遺跡／北野・神田木遺跡、同26 埋蔵文化財年報1999年度(CD-ROM)
- 田原本町教育委員会**
田原本町埋蔵文化財調査年報 9
- 岡山県教育庁文化課**
岡山県埋蔵文化財報告30
- 徳島県教育委員会**
勝瑞館跡
- 今治市教育委員会**
今治市埋蔵文化財調査報告書第44集 宮ヶ崎山形遺跡、同第45集 八町ヒル田遺跡、同第46集 四村額ヶ内遺跡Ⅱ、同第47集 高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ、同第48集 伊予国分尼寺遺跡、同第49集 馬越和多地遺跡・矢田西之窪遺跡Ⅱ、同第50集 石井国友遺跡、同第51集、内遺跡試掘確認調査報告書Ⅷ、同第52集 市内遺跡試掘確認調査報告書Ⅹ
- 福岡市教育委員会**
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集 香椎B遺跡、同第622集 香椎A遺跡2、同第623集 部木古墳群、同第624集 吉塚祝町1、同第625集 箱崎9・比恵甕棺遺跡、同第626集 堅粕4、同第627集 博多69、同第628集 博多70、同第629集 博多71、同第630集 博多72、同第631集 博多73、同第632集 博多74、同第633集 上月隅遺跡群2、同第634集 上月隅遺跡群3、同第635集 雀居遺跡5、同第636集 東比恵三丁目遺跡、同第637集 東那珂4・島田1、同第638集 那珂24、同第639集 那珂24、同第640集 板付周辺遺跡調査報告書第21集、同第641集 南八幡遺跡5、同第642集 笹原幡遺跡2、同第643集 麦野C遺跡、同第644集 井尻B遺跡7、同第645集 井尻B遺跡8、同第646集 日佐遺跡8、同第647集 田島小松浦・田島A遺跡、同第648集 梅林遺跡、同第649集 有田・小田部33、同第650集 吉武遺跡群Ⅻ、同第651集 有田・小田部34、同第652集 入部Ⅹ、同第653集 内野遺跡、同第654集 J R埋蔵文化財筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書、同第655集 周船寺遺跡群3、同第656集 小田C遺跡、同第657集 有田・小田部35、同第658集 井相田C遺跡5、同第659集 那珂26、福岡市埋蔵文化財年報VOL. 13

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第108集 若宮遺跡、同第109集 村徳永遺跡、同第110集 森田遺跡Ⅱ、同第111集 増田遺跡群Ⅳ、同第112集 若宮遺跡、同第113集 佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書、同第114集 薬師森遺跡2区・筑州遺跡1区、同第115集 上九郎遺跡Ⅰ、同第116集 上和泉遺跡12区・原ノ町遺跡4区、同第117集 吉村遺跡群Ⅰ・古村遺跡4区、同第118集 徳永遺跡4・5・6区

千代田町教育委員会

千代田町文化財調査報告書第27集 高志神社遺跡、同第28集 姉遺跡

宇佐市教育委員会

国道387号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ、宇佐地区遺跡群発掘調査概報XⅠ、同XⅡ

千歳村教育委員会

大迫遺跡徳原地区・原田第2遺跡原地区、五郎丸近世墓地群

木城町教育委員会

木城町文化財調査報告書第6集 石河内本村遺跡

玉里村立史料館

縄文から弥生へ、館報第5号

千葉県立房総風土記の丘

年報22

(財)新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館

若宮町遺跡Ⅱ、下戸塚遺跡Ⅳ、四谷一丁目遺跡Ⅲ、喜久井町遺跡Ⅱ、喜久井町地区早稲田大学喜久井町キャンパス地点、若葉一丁目遺跡

(財)五島美術館

珠玉の東南アジア美術

(財)出光美術館

館報第111、112号

国立歴史民俗博物館

研究年報8

松本市立考古博物館

松本市文化財調査報告No.142 平瀬遺跡、同No.143 砂原遺跡Ⅱ、同No.144 竹瀧南原遺跡Ⅱ、同No.145 芝沢遺跡Ⅰ・Ⅱ・南栗遺跡Ⅳ・Ⅴ、同No.146 大輔原遺跡、同No.147 出川南遺跡Ⅵ、同No.148 出川南遺跡Ⅸ、同No.149 松本城下町跡

塩尻市立平出博物館

五日市場遺跡、郷土の文化財22 樋沢遺跡、紀要第17集

滋賀県立安土城考古博物館

信長文書の世界

大阪府立弥生文化博物館

卑弥呼の音楽会

大阪府立近つ飛鳥博物館

平成11年度「古墳・飛鳥人になりきってみよう」実施報告書

東大阪市立郷土博物館

いのりのかたち

播磨町郷土資料館

埋もれた兵庫の遺宝

大分県立歴史博物館

年報平成11年度

東北学院大学東北文化研究所

東北文化研究所紀要第32号

早稲田大学會津八一記念博物館

弥生時代の早稲田ムラ

早稲田大学本庄考古資料館

大久保山Ⅷ 早稲田大学本庄校地文化財調査報告8

東海大学

王子ノ台遺跡 第Ⅲ巻

日本女子大学史学研究会

史艸第41号

明治大学博物館事務室

年報1999年度、図書目録第3号

大正大学史学会

鴨台史学創刊号

専修大学考古学会

専修考古学第8号

大手前大学史学研究所

有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ、有岡城跡の二十年

神戸女子大学

神女大史学第17号

奈良大学文学部文化財学科

文化財学報第17集、同第18集

天理大学附属天理参考館

天理参考館報第13号

嶺南大學校博物館

嶺南大學校博物館學術調査報告第26冊 時至の文化遺蹟Ⅰ、同第27冊 時至の文化遺蹟Ⅱ、同第28冊 時至の文化遺蹟Ⅲ、同第29冊 時至の文化遺蹟Ⅳ、同第30冊 時至の文化遺蹟Ⅴ、同第31冊 時至の文化遺蹟Ⅵ、同第32冊 時至の文化遺蹟Ⅶ、同第33

- 冊 時至の文化遺蹟Ⅷ、同第34冊 權守の
權慶男父子墓の調査報告書
- 忠南大學校百濟研究所
百濟研究 第32輯
- 釜山大學校博物館
釜山大學校博物館研究叢書第21輯 咸陽白
川里遺蹟、同第22輯 蔚山下垜遺蹟、同第
23輯 金海鳳凰臺遺蹟
- 泉水山・下ノ原遺跡調査会
泉水山・下ノ原遺跡Ⅱ
- (株)講談社
日本の歴史第01巻 縄文の生活誌、同第03
巻 大王から天皇へ
- (株)ジャパン通信情報センター
文化財発掘出土情報第224、225号
- (株)大巧社
継体王朝
- 朝日新聞出版局
アサヒグラフ別冊 古代史発掘総まくり
2000、発掘日本の原像 旧石器から弥生時
代まで
- 国立国会図書館
日本全国書誌通号2309号
- 文化庁文化財部記念物課
震災を越えて
- (財)韓国文化研究振興財団
青丘学術論集第17集
- 都内遺跡調査会
小石川牛天神下(CD-ROM添付)
- 大蔵東原遺跡発掘調査団
大蔵東原遺跡第9次発掘調査報告書
- 浜松市埋蔵文化財調査事務所
笠井若林遺跡4次、山の神遺跡5次
- とこなめ焼協同組合
常滑陶業の100年、常滑の陶業百年
- (財)古代学協会
古代文化第52巻第10～12号
- 郵政考古学会
郵政考古紀要通巻第37号
- 河内長野市遺跡調査会
河内長野市遺跡調査会報XX～XXIV
- 奈良国立文化財研究所
年報2000-I～Ⅲ、平城宮発掘出土木簡概
報(35)、木簡研究第22号、奈良国立文化財
研究所史料第54冊 山内清男考古資料12、
アンコール文化遺産保護共同研究報告書
平成8年度～平成10年度、タニ窯跡群A6
- 号窯発掘調査概報、タニ窯跡群測量調査報
告
- 朝鮮学会
朝鮮学報第176・177輯
- シルクロード学研究センター
シルクロード学研究8 トルファン地域と
出土絹織物、同9 ガンダーラにおける仏
教寺院の復原と整備に関する調査研究、同
10 中国・新疆トルファン交河故城城南區
墓地の調査研究、シルクロード学研究叢書
2、同3
- 博物館等建設推進九州会議・編集委員会
Museum kyushu 通巻67号
- (財)向日市埋蔵文化財センター
向日市埋蔵文化財調査報告書第51集(第1
分冊)長岡京跡ほか、同(第2分冊)芝ヶ本
遺跡、都城12
- (財)長岡京市埋蔵文化財センター
長岡京市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 大江町教育委員会
大江町文化財調査報告書第4号 旧平野家
住宅修理工事報告書
- 八木町教育委員会
京都府船井郡八木町文化財調査報告第6集
池上遺跡発掘調査報告書
- 大山崎町教育委員会
大山崎町文化財年報平成11年度
- 京田辺市教育委員会
京田辺市埋蔵文化財調査報告書第30集 薪
遺跡発掘調査概報
- 加茂町教育委員会
加茂町文化財調査報告第17集 恭仁宮(京)
跡発掘調査概要
- 京都府立丹後郷土資料館
丹後・海の100年
- 日吉町郷土資料館
大堰川に筏が流れた頃
- 綾部市資料館
あやべ歴史のみち
- 園部文化博物館
楽器たちのメッセージ
- 亀岡市文化資料館
亀岡の20世紀
- 宇治市歴史資料館
平成9年度・1997年報、同平成10年度・
1998
- 城陽市歴史民俗資料館

旅一長池宿、いく人くる人一、首長の装身
具、館報第5号

同志社大学歴史資料館

館報第3号(1999年度)

史迹美術同致会

創立70周年を迎えて

長岡京市ふるさとガイドの会

長岡京市の史跡を訪ねて

奥村清一郎

第8回京都府埋蔵文化財研究集会『京都の
首長墳』

河野一隆

考古学研究会岡山例会シンポジウム記録
1、考古学研究会例会シンポジウム記録2、
考古学研究会岡山例会第5回シンポジウ
ム、亀岡市文化財調査報告書第50集 市内
遺跡発掘調査報告書、同第55集 市内遺跡
発掘調査報告書、古代学協会四国支部第14
回大会研究会発表要旨集、宮津市文化財調
査報告2 中野遺跡、第2回古代武器研究
会記録

小林謙一

古代武器・武具の研究、日韓古代における
埋葬法の比較研究

坂 靖

伴堂東遺跡第2次発掘調査概報

清家 章

瀬戸内弥生文化のパイオニア

樋口隆康

大古墳展、大美和100号

星野猷二

塩澤家蔵瓦図録

松井忠春

東アジア1～3世紀の考古学

森島康雄

畿内・七道からみた古代銭貨

山本 崇

秋篠庄と京北条里

山本祐作

東播磨第7号

編集後記

新世紀を迎えましたが、編集子はいつもと変わらず慌ただし
い年度末を迎えております。また、昨年10月に開催した設立20
周年記念特別展覧会「京都・時を旅して」ならびに、講演会
「京都・古代の輝き」には、多数の方々に御来場いただき、誠
にありがとうございました。本号は、昨秋に話題となった峰山
町赤坂今井墳丘墓の詳細と、発掘調査のデータに基づいた職員
の力作を掲載しました。巻頭カラー図版の、第4主体部の被葬
者頭部を飾る玉飾りは、1800年前の弥生美人の姿をほうふつと
させます。

(編集担当＝河野一隆)

京都府埋蔵文化財情報 第79号

平成13年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代) Fax 075-922-1189(代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel (075)441-3155 (代) Fax 075-417-2050(代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER